支那の學問の話

常德惠――といふ老先生があります。前清の文官試驗に合格して「擧人」の資格を持つてるのですから、一ヶ月六圓や八圓の家庭教師には勿體ない人物といへば言へます。

「F先生、あんたの國の總理大臣ともあらうものが、こんな詩より作れんぢや、困つたもんぢやないですかッ。これぢや、まるで我國の村塾の生徒の作品よりも酷いとは思はんですかネ」

世が世ならば滿人八旗の旗人（旗本）で、零落しても尙、昔の全盛を偲ばせるオットリした所を持つた老先生が、いつになく激しい物の言ひ方です。

吃驚した私が、この先生の差し出す紙片を見ると、何處で手に入れたのか、日本の新聞の切り抜きで、二十八字の漢字が、小さく四行に並んでゐました。作者は克堂とあつたんですから、多分今の若槻禮次郎男爵に相違ありません。若槻男は日本の政界では、人も知る漢詩の名人の一人で、男爵を中心に、我國の斯界の權威者が時たま集會など催してられるんだから、男爵の詩が拙い筈はありません。

それでも、漢詩の本場の支那人から見ると、やつぱりいけないらしいのです。特に若槻男が總理大臣であられたことが、なほいけないらしいのです。何となら、彼の國では、苟くも大臣となる程のものは、立派な國學者（漢學者）でなければならなかつたからです。

○

若槻男は、言つちや失禮ですが、斯の道の素人です。その素人の詩が、本場の支那人の物嗤ひの種になるのは、それこそアッタリマエデセウ……といふものです。

所がその道の專門家である漢學者方の機關雜誌「日東文化」が、支那人學者の所

へ寄贈されて、途端に支那人學者間に「日本の漢學者輕蔑すべし」の風潮を生ぜしめたんだから由々しい問題なのです。

話といふのは斯うです。その「日東文化」の表紙には、その團體の名や、雜誌の號數やが、例のてん刻といふ、判コで印刷されてゐるのですが、問題は此の判コなのです。御承知の様にてん刻といふものは、本當の文字學者がやつたものでないと、どんなに綺麗に刻つてあつても三文の價値もないものなのです。

苟くも日本の漢學者方の雜誌「日東文化」ですから、恐らく立派な文字學者がお彫りになつたに相違ないと思ふのですが、支那人學者の方ではさうは言ひません。どの學者も、どの學者も、

「こんな判コは、我國では學問のない職人が彫るんですぜ」

ですつて。

○

老頭兒（ラオトール）（爺や）――と呼びなれた周といふ老人も、世が世ならば前清の旗本の一人で、其の昔、光緒皇帝の御佑筆をつとめ、二品官（正二位）にまで昇つた身が、如何に時世時節とは言ひながら、人もあらうに此の私のボーイになつて、馴れぬ手にフライパンもつて鷄卵を燒いたり、十錢紙幣握つて燒栗買ひに走つたり、文字通り薪水の勞に服してたんだから、御當人實に感慨の無量なものが有つたらしいんです。

尤も、前途に光明のない年齡になると、人間は誰でも回顧的になるものですが、既に身心共に疲れ切つたこの老人も、御多分に洩れず、何かと時めいた昔を偲んでは、結局は愚痴に墜ちるんです。

尤も今どきの支那人で、前清時代の旗人の愚痴に耳を傾けて呉れる者なんて居ませんし、結句、この私が、一番よい聽き手であつたのかも知れませんが、兎に角、この老人の話によると、清朝全盛の時は、英國でも、佛蘭西でも、魯國でも……何處の國だつて、清朝の威勢の前には震へ上つたらしいのです。

今度、臨時政府樹立でニュース寫眞に出た、大和殿（白い大理石の橋のある前庭から這入つた所です）などで、前清の文武百官が綺羅を飾つた間を通つて皇帝に拜謁する外國使臣は、皆清朝の威儀の盛んなのに愕いて、ブルブル震え上つてゐたものださうです。

「然しねえ旦那、たつた一人震え上る所か、實に堂々たる使臣が一人居りましたわい。それはお國の副島（フーダオ）ですわい」

「あんな立派な使臣は、何處の國にも居らんかつたですわい。でも後で聞いてみると、立派なのも道理、あの人には學問が有つたんですからなあ」

學問といふのは、勿論、向ふの國の學問——漢學です。副島蒼海先生なら、今に尙その高風を慕はれる大學者です。

「所がどうです、今のお國の使臣諸君は、どれもこれも學問のない連中ばつかり。それで我國人の尊敬を買はうつたつて、それや、無理といふもんでせう」

學問といへば、國學（漢學）以外にないと考へてゐる老人の無智さを嗤ふべきでせう。けれ共斯んな人ばかりなればこそ、アメリカで植物學を專攻して戻つた先生が、大學の國文教授になる支那なのです。その支那で苟くも仕事をしようとする者は支那文化に就いての一通りの認識を持つて居なくてはならぬといつたら無理でせうか。

魯仲連を十九路軍の隊長だと主張して讓らなかつた（多分孫連仲と間違へたんでせう）銀行家氏と、文天祥といふ人は市政府でいま何をしてゐる人ですかと訊いた外交官氏とに、私は北京で出逢つたことが有るのです。

西直門内の人・柴五郎

北京を離れて京綏線へ、破竹の勢ひで出ていつた皇軍の戰闘を、ラジオのニュースで聞いた時、私はふと京綏線の始發驛、といつていい――本當の始發驛は豐台――西直門火車站を思ひ出した。といふのは、この停車場の待合室で、私は辮髪の一老爺から、卒然として次の様な言葉をかけられたことがあるからである。

「閣下は日本のお方ぢやらうなあ」

「然り。さり乍ら私は閣下ではない」

閣下（ハーシャ）といふ言葉が普通の「貴君」を意味するなどといふことさへ知らなかつた、當時の私にとつて、この答辯はほめられてよからうと思ふ。

「閣下が日本人ならば、多分、チャイ・ウー・ランを御存知ぢやらうと思ふが、どんなもんぢやらう」

「チャイ・ウー・ランなんて知らんぬえ、そりや一體何かい」

といふ私を、如何にも輕蔑した様子で、而も長太息まじりに、

「あゝ何たることぢや。あのチャイ・ウー・ランも、教育のない日本人の中では（本當にさう言つた）知られてゐないと見える」

と歎いた老翁の語る所によると、チャイ・ウー・ランといふのは、北清事變の際、各國軍隊が入城した、その時の日本軍の指揮官だつた。そしてこのチャイ指揮官があつたために、當時の北京の市民は、ロシヤやイギリスやフランスやといつた各國兵の蹂躪を逃れて、日本軍の守備區域である北城に集まり、漸く生命財産の危險から救はれたのである。日本軍は原來（といつた）軍規の嚴しい軍隊であるが、あの時は特にそれが嚴しかつた。北京の市民が老若男女となく、みんな日本軍に馴付いてしまつたのも、彼等が保護こそすれ、市民を困らせたり虐げたりすることがなかつ

たからである。これには深い理由があるので（と、遽かに小聲になつた）指揮官のチャイ・ウー・ランといふのは、實は支那人なのである。それが、若冠にして志を立て日本に渡り、身を軍籍に置いたのだが、あの事變に際しては、部下を引卒して自分の母國へ來ることになつた。從つて彼が部下に申含めたために、他國の兵が亂暴狼籍を働いても、日本軍だけがそれをやらなかつたんだと思ふ……といふのである。仍で私はハタと思ひ當るものがあつて、思はず大きな聲で叫んだ。

「アッ！　知つてる！　チャイ・ウー・ランか、なるほど……」

「えッ、知つて居られるか、あのチャイ・ウー・ランを」

知らないでどうしよう、柴五郎大佐――今の大將である。一字の姓で、二字の名。柴といふ姓は百家姓の中に張だの蔣だの王だの李だのといつた姓と肩を並べてゐる字だし、五郎といふ名にしても水滸傳あたりに有りさうである。これを支那人が支那よみにして、自國人だと考へたとしたら、それこそ教育のない支那人には有りさうな錯覺である。それにしても、私を呼ぶに閣下を以てした此の老翁の、何と柴大將閣下を呼ぶに心安だてなる。

「知つてゐるとも、柴閣下ならば、日本で最も有名な將軍の一人であられる、これは三尺の童子と雖も、その英名を欽慕してゐる位である」

「さうぢやらう、チャイ・ウー・ランも（又しても呼びすてである）昇進したぢやらうなあ、今では……」

「然り、陸軍大將で在られる。お國の上將ぢやな、つまり」

「陸軍上將……日本の陸軍上將は仲々普通の事ではなれまい」

「然り、昇つて大將に至るには仲々並大低の事では……」

「さうぢやらう、そんなにまで日本國の、皇上の御恩寵に浴して、チャイ・ウー・ランは幸福ものぢやなあ……。そうぢやらうとも、あの男なら、こつちに居ても督軍位にはあの時分でもなれる男ぢやつた……」

「それにしても、あの柴閣下がお國の人とは知らなかつたな」

と笑ふ私を押しとゞめた老翁は、いとも眞面目な顔付きになり、又もや聲をひそめると、

「實はなあ、チャイ・ウー・ランは、西直門裡頭（シーチメンリートウ）の人ですわい」

と言つた。その上、別れる時には、わざ〳〵私に、閣下も何れ日本に歸るぢやらうから、チャイ・ウー・ランに會つたら自分がよろしく言つて居つたと言つて呉れと傳言まで託し、私が「あんたの名前は」ときくと「趙德明」と地上に大書してから

「儂も西直門裡頭（シーチメンリートウ）の人ですわい」

と言つて、カラ〳〵と笑ひ聲を殘して、去つて行つた。

滿洲事變の一年前のことである。

滿洲事變が起つて、國民黨や市政府が「殺・掠・姦」の大きな繪看板まで出して皇軍の惡宣傳に懸命になつても、北京の市民がなか〳〵思ふ樣に動かなかつたのが、

今度の事變で、舊時を知らぬ若い市民までが、眼のあたりに皇軍の入城を見、軍規の嚴肅を見て、恐らく彼等には神話にひとしい――軍隊には軍規がつきものだ――といふことを學んだことであらう。それと共に、また、わが部隊長にして後世北京の市民から、あれは西直門、あれは崇文門、裡頭（リートウ）の人なんだ……などと言はれる人が數多く出て來ることであらう。

それにしても趙老人の傳言を、柴五郎閣下にお傳へすることを、私は未だ怠つてゐる。お傳へしないでゐて、日本人は信用出來ぬ――などと惡口言はれてはならぬと、今もなほ、思ひ〳〵しながら。

布子着た支那の兵士

私は嘗て北京の邦字新聞のために「支那の兵士」といふ唄を書いたことがある。

それは、

かなしきは　支那の兵士よ
胡同（ホートン）の夜更け　さびしく
肩を落して
凍てた菜を　下げて戻るよ

かなしきは　支那の兵士よ
綿入れに丸く　着ぶくれ

營庭の日向に
群れて打つ　銅貨博奕よ

といつたものである。又同じ北京の長城吟社といふ句會で

布子着て菜をさげてゆく支那兵士

と吟んだこともある。唄も句も慚汗に價する代物でしかないが、兎に角、日本では想像もつかぬ汚らしい綿入れの軍服に着ぶくれて、悄然と木枯に吹かれてゆく支那兵士に、勇壯だの活潑だのといふ熟語は他人である。

彈のない鐵砲、それも街に遊びに出して貰へる時には上官におあづけ、腰の劍もとり上げられた丸腰に、皮帶一つ。而もその皮帶さへ、天橋（テンチヤオ）あたりの路傍の古物屋に賣つて逃亡するのがあるといふ話であつた。

支那の兵士は傭兵で、給料は大低五圓か六圓。而もその月給の内で食はなければならぬ。各隊には料理人が居て、各兵士の食事をこしらへて居る。飯代は給料日に

さつ引いて渡される。手の空いてる兵は菜ッ葉や葱買ひに走らされもする。

所が、面白いことは、この兵隊が戰線に出た時、行軍中は、散兵中は、まだ食費は自辨である。けれども、一發ズドンと鐵砲をうてば、うつたその途端から食費が親分持ちになるのである。從つて從來年中行事の内戰があつても、親分の軍閥は仲仲鐵砲をうたせない。兩方からスパイを放つて自分の兵力を誇大に宣傳する、その宣傳に負けて軍に動搖を來すと、必ずその軍の負けになつた。

けれども兵の方では、事が食費に關するだけに、一刻も早く、何か機會があればズドンとやつて、親分持ちの食事に有りつかうとする。これが幹部が何と誓約しても、支那軍に不法射擊の絶えない理由である。

何しろ親類縁者は固より、世間樣から見放された無賴漢が、喰ふに困つて——いつそ兵隊にでもならうか——といつてなるのが、支那の兵隊なのだから、良心だの、正義人道だのといふことは、全く神話に等しい。

私が半年ばかり使つて居つたボーイは、もと吳佩孚將軍の部下として各地に轉戰した上校（大佐）であつたが、自分が嘗て兵隊であつたことを非常に恥ぢて、

「私の樣な正しい人間には、軍人はつとまりません」

と切りに言ひ〳〵して居つた。彼が軍人をやめた理由は、親分吳佩孚の失脚によること勿論であるが、本當は長期に亘る給料不拂にあつた由、これは他のボーイに話して居つたさうである。

普通の兵士の月給が五圓か六圓だといつても、數が多いのだから雇主の親分の身になると、仲々の物要りである。從つてどの軍閥も何とか彼とか理屈をつけて給料をやらない。そんな時、支那の兵士は民家に押入つて强奪をやる。親分の方も見て見ぬふりをしてゐる。それで給料の方は棒曳きになるからである。

嘗て滿洲の張一家が沒落すると、奉天政府の銀行がつぶれて、その銀行が出してゐた紙幣が一夜のうちにルーブル紙幣みたいになつてしまつた。然るに張學良は其

の紙幣で兵隊の給料を支拂つたのだから心臓の強い親分もあつたものである。兵士も兵士で、北京の各商店で十錢位の買物をして其の百圓札で釣錢を寄越せといふ。どこの店でも泣く子と地頭にはかてぬ譬どほり「兵先生（ピンシエヌシヨン）」の買ひ物の度に、斯うして九十九圓九十錢と、十錢の品物とを出して、今は紙キレにしかすぎない百圓札を泣き〳〵頂戴に及んだ次第であつた。

しかし、これなどはまだ忙（たち）のいい方で、支那の兵士はもつとひどいことを平氣でやる。此度の事變前まで支那新聞の社會面に毎日一つや二つ現れて居つた「盜墓案」（墓あばき事件）は、多く斯うした兵隊の仕業だといはれて居る。日本では、昔から死人には六文と決つてゐるが、支那では金銀珠玉から何から、副葬品が頗る厚いので、それをねらつて、斯うした犯罪が今に絶えないのださうであるが、事變前までは、共產黨、土匪、盜墓、阿片中毒で官設施療所に二回這入り三回目に捕へられた者は、裁判なしの銃殺とされてゐたに拘らず、墓盜案が絶えないのは、支那兵の絶えない限り致し方のないことであるらしい。そこで、支那の良民諸君は、昔からある

「好鐵不打釘、好人不當兵」

（好い鐵は釘にならぬ、好い人間は兵隊にならぬ）

といふ諺を操りかへし乍ら、「沒法子（メイファツ）」致方がない——と天を仰いで長嘆息ばかりするのであつた。

因に、支那軍隊中には優秀なる武器を持ち、四十人乘りの裝甲自動車なんかにのつて、外國居留民の住居近くを通つたり、外國名士に見せたりする爲の、上等の兵士も相當有つた。從つて事變前までは、そんなのを見せられて、支那は起ち上つたと吃驚して戻つた——國民政府の思ふ壺にはまつた——支那通方が、固より當然の皇軍の威武に、もろくも潰えてゆく支那兵を見て

「嗚呼、遂に内戰の雄に過ぎざりしか」

と叫んでゐるのは、滑稽なる悲慘事である。

日支同文ものがたり

今はむかし、筆者が未だ學生で、北京東四牌樓（トンスーパイロウ）の下宿に、南京虫と懇意な生活をしてゐた頃。日本から同じく留學生としてやつて來た漢學者（せんせい）がある。支那語の一二三（いろは）も御存知ない癖に、支那人下宿に這入りたいと仰有るので、下宿を探して話を決めて、電話で迎へに行つてやると言つて置いたのに、その漢學者は、日本旅館で人力車を雇はせ、單身その下宿先へ乘り込んだのだから、今でいへば相當以上の逞しい心臓の持主だつた譯である。

下宿先まで辿りついたが、支那語の方はまるでお出來にならない漢學者である。先方のボーイが出て來ても、盲啞學校ぢやないのだから、身振り手眞似で用の足りようわけはない。ところが、窮すれば通ず、漢學者本職の筆談でお出掛けになつた。

この方なら自信たつぷり、餘り返つてお釣が來よう……位の實力も自惚もあつたからである。そこでその漢學者は、鉛筆の先をなめ乍ら、有り合せの紙片に、

「我室在何處？」

と書いてボーイに示した。所で相手は百三十五人に一人、僅に文字を識つたのが居るといふ、文盲にかけては世界の三大國民たる支那人である。渡された紙片を、ためつすかしつ見てゐたが、いくら見たつて知らない文字が讀める譯があらうか。

やがて紙片を持つて屋内に這入つて行つたボーイが、誰かに讀んで貰つたと見へて、再びその紙片を持つて例の漢學者（せんせい）の所へ戻つて來た。

漢學者（せんせい）、ボーイが差し出す紙片を見ると、自分が書いた堂々たる漢文？の横に

「我未不知斯人」

我未だ斯の人を知らず――と讀んでは面白くない。ソンナ人知りマセンヨ……と訓むと、恰度ピッタリ來るのである。

扨、讀者諸君。例の漢學者したたむる所の「我室在何處」は、流石堂々たる漢文で、と申して、こんなもの中學二年の實力あらば――などと言ふこと勿れ。これを我が室何處在りや――と訓むことは、よしんば中學一年を二學期で退學しても、讀むことが出來るのである。ところが、之を譯して、私ノ部室ハ何處ニ在ルカ――となると、矢張り漢學者の許に相當の年期を入れた者でないと、やれない藝當であるらしいのである。

論より證據である、例の漢學者は、そのつもりでこの六文字を書いたのである。然るにその返事「我未不知斯人」とは何たることであらうか。

嘗て孔子孟子を生んだ支那である、如何に衰へたりといへ、如何に專門家の書いた文章とはいへ、字數にしてたつた六字、これをしも讀解することが出來なくなつたのであるか！　漢學者、暫し悵然として斯文の衰へたるに慨嘆し、斯くては果てじと、再びもとの日本旅館へ立ち戻つたのである。

所で、讀者諸君。どこで話が斯くも間違つたのであらうか……などと思はせぶりなことを言はないで、直にネタを割つてお目にかけよう。問題は

「我室在何處？」

の「我が室」にある。この室を、部屋と考へるべく、今の支那人の頭は、餘りに良くなさすぎる。そんなら何と譯すかであるが、この室は夫人である、妻である。

「我室在何處？」

と書かれた下宿屋が、

「我ガ妻、何處ニ在リヤ」

と訓んで、私ノ家内ハ何處ニ居リマスカネ……と譯した所で、ちつとも先方に落度が有るわけのものぢやない。それだからこそ、

「我未ダ斯ノ人ヲ知ラズ」

ソンナ人ハ知リマセンヨ……といふ答へが出て來たこと、鷄卵から鷄の雛が生れて

來た位のことで、ちつとも慨嘆すべき出來ごとでない……と思ふが、どんなものであらう。

そこで、三たび、讀者諸君。これでも日支は同文なりと言へますか……などとは言ふまい。たゞ

「支那語なんか出來なくても、まさかの時は筆談でゆかう」

といふ論客には、「支那語のすゝめ」の序文代りにはならぬものだらうか。といつても、それは決して我田引水から言ふのではない。

とまれ、北京といふところは、漢學先生のメッカである。そして毎年五月になると、漢學先生の鳳雛だの雀雛だのが、留學生になつて、渡り鳥の様に玄海を越えて渡つてゆくのである。而もその雛の中には、本文の漢學者みたいな筆談先生、同文主義者が、隨分と多いことではある。

北京風聞雜記

村に歸へる青大人

一

昭和七年九月初めの雨上りの或る日、私を乘せた自動車は、西直門（シーチメン）の電車停留所の人込みに立往生をさせられて居た。自動車が動かぬので、見るともなく今着いたばかりの電車から降りた人々を見てゐると、その人込みに押されて電車を降りた尺に餘る黑鬚の老翁があつた。

すると、方々に屯してゐた拉車的（くるまひき）が、彼方からも此方からも、

「青大人（チンダーレン）だ、青大人だ、拉罷（ラーバ）（曳いてゆきませう）、拉罷」

「我拉罷（ウォラーバ）（私が曳いてゆきます）」

と、一せいに此の老翁めがけて殺到して行つた。

「青大人回來了（ホイライラ）、（青大人おかへりなさい）」

「青大人、青大人」

傍に居合せた支那人もまた一せいに叩頭をしたり、帽子をとつたりしてゐる。人にさへぎられて遠い者は、伸び上つてゐる。

それから後のことは、私は知らぬ。けれども、自動車が動き出すと、支那人運轉手が私に聲をかけた。

「F――先生、汝は彼の老翁を知れるか、彼も亦日本人である」

「然り、予は彼の老朋友にして、恐らくは藍靛廠（ランテインチヤン）の別墅に行かんとするものなることを知つて居る者である」

支那語が拙いので、譯せば大體こんなものにならうか。

すると運轉手は乘り氣になり、

「F――先生、汝が言ふ所に一點の誤りなし。實に彼、青大人は藍靛廠に行くのである。思ふに藍靛廠の村民は大いに歡喜して彼を迎へるであらう」

といひ、更に彼が青大人を如何に日本人中の日本人、最も尊敬すべき日本人として認識するに至つたか――といふことを雄辯にしやべり立てた。

「青大人は、かつて藍靛廠に住んでゐたのである。それは五六年にも亘る長い期間であつた。それ故、土地の人間で青大人を知らぬ者は一人もない。何とならば、青大人は彼の村にそんなに長く住んだ上に、人物が偉大で學問が有り、その上他人に對して親切であるからである。村の者で爭ひごとがあつて解決のつかぬ時には必ず青大人の所へ持ち込んだが、青大人の公平な裁きには、双方共成る程と點頭いて引き退るのを常とした。終には、村人で惡事をなす者は、その事が青大人の耳に這入りはせぬかとビクビクするに至つたのである。青大人は今、城内に住んでゐるが、大人がさうして村を出て他へ移り住むことは、彼の村の人間の最も好まないことであつたのである。青大人が城内に移り住む時の如き、村の老頭兒から小孩兒に至るまでが、名殘を惜しむさまは、ちやうど父母に別れる樣でさへあつた。そして村人の其の氣持には、今もなほ毫末の變りもないのである。此の頃は滿洲事變などの爲に、どこもかしこも打倒日本でやかましい時であり、日本人と我が國人との間もよくなくなつてゐるが、ひとり彼の藍靛廠の村だけは、さうではない。試みにF——先生、日本人である先生が、今あの村に行つても、汝は青大人と同じ日本人である——といふ、たつたそれだけの理由で、村人の心からなる歡迎を受けることが出來るであらう」

と言ふのである。そこで私は運轉手に聞いた、

「所で、汝も亦青大人を識れる者であるか」

と。すると運轉手は、とんでもない——といつた樣子をして言つた。

「否、私風情が如何して青大人に近づくの機會を持ち得ようか。けれども、青大人の人格と學問の高いことに就いては、之を聞くこと久しいのである。如何とならば、私の同僚に、藍靛廠出身の者が居るからである」

さて私は、こゝらあたりで運轉手との饒舌をやめよう。そして青大人の話にうつらう。因爲甚麼（これは今の運轉手の口癖である）、其の青大人が、いまはた北京城

内の生活を打ちきり、藍靛廠の村人の要望によつて、藍靛廠に歸つてゆくこととなり、近く北京を去るからである。

二

青大人とは……。恐らく讀者はさう思ひながらこゝまで讀んで下さつたことと思ふ。まこと、青大人とは、北京東廠胡同、東方文化事業總委員會の青木晉先生その人なのである。讀者の中には（あゝ、あの青木さんか）と、尺に餘る黑髮を思ひ出される方もあらう。その青木さんこそは、藍靛廠七百の村民は固より、附近農民から師父と仰がれ、慈母と慕はれる「青大人」その人に外ならぬ。

さう言へば、あの特長のある黑髮の颯爽たる威風の裡にも、何處となく駘蕩たる春風のある青木先生が、その文化事業總委員會に在る、常に若い留學生達から、始めの「先生」が次第に「小父さん」となり、「小父さん、小父さん」と慕ひ寄られてゐる所以も分明せぬことはない。

青木先生――。筆者などには呼び馴れた「青木の小父さん」の支那生活は、日露戰爭から始まつてゐる。古いことである。

もう北京に來てから十四五年にもなるといつて、老北京振つてゐる文化事業の橋川醉軒氏が、初めて北京大學へ講義を聽きに行つた時、既に青木の小父さんは、あの長髮をなびかせながら、

「私も此の大學で勉强しはじめて八年になる」

と言はれた。これを聞いて流石の醉軒氏も驚き、學問をすることの至難と、前途の遼遠とを痛感したといふのだから、兎に角「老北京（ラオペーチン）」の一人でなければなるまい。

青木の小父さんは、文字學を專攻した文字學者である。文字學の學者は日本にも尠い。何故尠いかといふと、これ一本槍では飯の種にならないからである。こゝに日本に、文字學の專門家の殆んど居ない理由があるのであるが、選りに選つてその飯の種にならない文字學に全精神を打ち込み、半生以上を捧げ盡して來た所に、實

は青木の小父さんの本領があり、眞面目があるのである。

嘗て、京城帝大の教授、加藤常賢氏の如きは、一日小父さんの文字學に就いての研究の一端を聽いてより以來、

「あの位立派な學者は日本にもゐない。研究を發表なさりさへすれば、天下の人が驚く。それに如何して、日本へ歸らうとか、發表をしようとか、いふことを考へられないのだらう」

と口癖のやうに言つたものである。

事實、筆者の知る限りに於いて、小父さんの藍靛廠生活は、ひたむきな研究精進の爲の生活であつた。五年、十年、小父さんが傍目もふらずに續けられた多年研究の成果が、既に積んで山をなし、巍乎として人々をして仰がしめるに至つたとて、何の不思議であらう。

以て一世に名を顯はすに足り、以て洛陽の紙價を高からしめる位のことは、固より易々たるものがある。而もそれを欲せぬ小父さんの淡々たる無慾さ、野心のなさは、加藤氏ならずとも小父さんを知る者をして、齒搔ゆがらせないではおかない。

けれども、小父さん自身にすれば、

「好きでやる學問である限り、別にそれによつて社會的な榮利を求めることはない」らしいのである。

だから小父さんは、其の好きな酒盃と同じ程度に、學問を娛しんでゐる人とも謂へる。それと同時に、榮譽や利祿のためにいがみ合ふ人の多い今の世にとつては、善良な拗ね者であるとも言へよう。

青木の小父さんは、それだからこそ、自からの學識を以て售ることをせぬ。良賈は深く藏して空しきが如しといふ古語を、人間に譬へれば、それは青木の小父さんだと言へる。三年か五年、學校の授業で聞きかぢつた學問を、やれ專攻學科だの、專門學だのと言ひ、未だ研究途上の、有るか無しかの學問を鼻にかける手合の多い

近頃、世の學者や學生は、小父さんの奥ゆかしさの萬分の一でも學んだがよい――と言ひたいものである。

氣取つて言へば、孤胸なほ百萬の甲兵を有しながらだ、そんな固くるしいこと口にもせず、溫容慈顏、小父さんは常に盃である。

まことに小父さんは昭和の李白である。而も、皇帝召せども船より上らず――などといふ、だらしのない李白ではない。微醉唇頭をついて吐露せられる大陸政策や、外交問題の盡くが、その老いたる赤心鐵腸より出るのを知つて、頭を下げぬ者は、志士でもなく、國士でもない。

筆者は、青木の小父さんといへば直ぐに、日本の李白、兒玉花外翁を聯想する。これは兩者互ひに相通ずる一脈が有るが故である。

花外翁は、嘗て東京日日の千葉龜雄氏も言つたやうに、裡に烈火の如き熱情を持ちながら、持つて生れた名利に恬淡な性情から、世と相俯仰することが出來ず、世に拗ね人に拗ねて、現代詩壇の拗ね者として通つてゐる。此のことは、有りあまる學識才能を持ちながら、大賢は市井にかくれるといふ諺そのままに、利達を事とせぬ青木の小父さんと一脈相通ぜぬことはない。

けれども、筆者が此の二先輩を目して相通ずるとなす所以は、其の「酒徒」たる點に於いてゞある。酒徒としての本領は、娛しみて之に醉ひ、醉ひて亂に至らざることにある。

文章の士にして近代の酒徒といはれる者には、桂月あり、牧水あり、善藏あり、清造あり、勇あり、殆んど枚擧に勝へないものがあるが、右の本領にたがふことのない者となれば、蓋し右の二翁には及ばぬであらう。

三

徒らに紙數を費すことをやめて、扨、これから本題に這入らう。

藍靛廠（ランテインチヤン）とは、もと紅門村の地。明末に藍畑を設け藍玉（藍靛）をとり、織物と

染め物の工場（廠）を置いた。それが地名となり、更に清朝の時、離宮圓明園（ユアメミンユアメ）の守備兵の兵營を置いたため、其の兵の家族等によつて開かれた土地である。

西直門を出て西すること十二支里、萬壽山と西直門との中間、南によつた、人口約七百の村閭ではあるが、酒屋も飲食店も洋車（くるま）の丁場も、小さいながら備はり、街道に添つた一條の如きは、兎に角一應は町並の觀を呈した家並のある所である。

そこにわが青大人こと青木の小父さんは、文化事業部に來るまでの五年餘の閑日月を送つたのである。優しい、上品で敎養の高い夫人の重野小母さんと唯二人、電燈も何もない此の土地に、支那人のみの中に、五年にあまる歳月は、今からこそ五年といふ一句話（ひとことば）であるが、短かからぬ生活であつたと謂へる。

筆者はその五年間の出來事を、生活を、讀者に傳へる程の知識を持つてゐない。たゞひ持つてゐたにせよ、その五年の歳月を一管の筆に托すべく、筆者の筆はあまりに拙いのである。

乃ちこゝでは、二三、此の小父さん小母さんの藍靛廠生活のプロフヰルをうつすことゝしよう。

青木の小父さん達の家の窓からは、あの萬壽山や、玉泉山の山なみが、手にとる樣に見えた。小父さんは、そこでコツ〳〵と古い支那の書物を讀んだり、寫したりしてゐた。小母さんは、日本から屆いた日本の本を讀んだり、編み物をしたりしてゐた。

そこには電車も自動車も……、一切の都會の騷音が絶たれてゐるので、あるものはたゞ農村の平和と靜寂のみであつた。どこからか鷄の聲が、靑空にひゞいてこゝの窓にまでさこゑて來た。

訪ねて來るものは、隣家の翁だけである。「隣叟ハ情深ウシテ夜扉ヲ叩ク」とは此の事であつた。けれども、これは院子（にわ）がつゞいてゐるのである。

街道に面した表門には紐がたれてゐて、之を曳けば裡頭（うちら）で鈴が鳴つて、來客の門

前に至つたことが内に知れるやうになつてゐるのだけれども、此の紐を曳く訪客の到らぬ日が、毎日つゞいた。日本人に接しないことが、月餘に餘ることが、幾度もあつた。

尤も、日本人といへば、北京から訪ねて來る人以外に有るべくはなかつたが、共同通信の風間さんや、同仁病院の生島さんやといつた風流の士は、一つには北京の俗塵を避けるために、一つには小父さんとの清談をたのしみに、よく遙々と小父さん達を訪ねてやつて來た。

表門から家までの間は相當の距離があるけれども、鈴が鳴るとソレとばかりに駈け出してゆく小母さんは、いつも如何して門扉をあけたか覺えてゐない位に、周章てゝゐた。日本人が、客人が、なつかしかつたのである、うれしかつたのである。

斯うして二人つきりの靜かな生活に馴れた小父さん小母さんも、やつぱり北京からの邦人の客がうれしかつた。本當のところ、小父さんも小母さんも、いつも土曜、日曜には、鈴の鳴るのを心待ちにしてゐた。ことによると其の前日から、鈴の鳴る土曜日曜を待ちこがれてゐたかも知れぬ。

けれども、さうして待つた土曜にも、日曜にも、とう〳〵鈴が鳴らずに日が暮れることが多かつた。まことに寂しい生活ではあつた、けれども平和な、靜かな、其の日〳〵であつた。

院子（にはこ）に花を作つた、樹の枝に鳥籠をかけた。花は四季折々に其の粧をこらし、小鳥は終日高く囀つた。

小父さんは、日課の勉强にも厭きると、

「婆さんや、散歩にゆかう」

と、小母さんを誘つては散歩に出た。鍵をかける要もない、聖人の世の民の樣な周圍だつた。小母さんは、野原で喰べるお辨當を作ると、それを抱へて跟いて出た。

門を出ると、近所の村人は、みんな仕事の手をやめて叩頭をした。傍によつて挨

拶をした。

「青大人（チンダーレン）だ、青太太（チンダイダイ）だ」

村人は次々と傳へ聞いて、挨拶したり叩頭したりするために街道に出た。小父さんの慈顔はほころび、やさしい瞳は一層和やかに、そして一々挨拶をかへした。

家並を出て、街道をはづれ、一面の畑道に出ると、野良仕事をしてゐる村人が、一々畑から出て來て小父さん達に挨拶した。みんな笠をとつて。みんな笑顔で。空はいつもよく晴れてゐたし、人々の面はみんな、みんな明るく輝いてゐた。

此のあたりは、明朝の時分からの由緒のある土地だけに、時々畑の中に古い石碑が立つてゐた。そんな時には、小父さんは用意の手帖を出してそれを寫すのである。その間、小母さんは百姓の子供達と話をしてゐた。

菓子を持つてゐる時は、自分達の食ふ分も殘さず、みんなに分けてやつた。子供達は叩頭をしてから、大聲で、

「おつかあ、青太太（チンダイダイ）がお菓子下さつたよォ」

といつた樣なことを、野良仕事をしてゐる母親に告げたり、遠くて聞えぬ者は、兩手に菓子をかゝえたまゝ、兩親の働いてゐる畑まで駈けて行つた。

小父さん小母さんが野道へ來ると、その子供の親達が、仕事の手をとめて笠をとり、敬虔な叩頭をした。そして、或る者は畑の大根を拔いた、或る者は菜ッ葉を。そして、かよわい小母さんにも持てる樣に、ちやんと揃へて結へて與れた。

「そんなものを青太太に持たせてどうするだ、このろくでなし。夕方になつたらお家までお屆け申せ」

中には、嬶天下の支那らしく、女房に叱られる農夫もあつた。

小母さんが、いくら辭退しても聽かなかつた。仕方がないので、それを貰ふと小母さんは、こつそり子供の掌にお錢を握らせて戻るのだつた。

藍靛廠の傍には、萬壽山の湖に通ずる川が流れてゐて、大きな鯉や鮒が釣れる。

小父さんは、よくその川へ釣糸を垂れに行き、ぢつと浮標を見ながら、いま讀んでゐる書物の内容を頭の中で反芻しては、沈思することにしてゐた。

この川で漁をすることを内職にしてゐる村人が、小父さんの釣り姿を見ると、すぐに駈け寄つて來て、自分の釣つた獲物をみんな小父さんに呉れた。この男の考へによると、

「釣なんぞ自分等の様な賤しい者のすることであつて、苟しくも青大人ともあらう人にさせるべきことではない。魚が入用なら、自分の釣つたのを差し上げる」

といふのにあつた。そして小父さんが辭退すればする程、彼は懸命になつて、それをすゝめ、なほも辭退するのは、魚が少いからだと考へたと見えて、

「足りない分は、夕刻までに自分が釣つて持つて行つて差上げます」

とまで言つた。小父さんは、釣りの趣味を解して呉れぬ村人に寂しい氣持になつたが、併し誤まつてはゐてもその厚い好意には感謝しながら戻るより外はなかつた。

藍靛廠にたつた一軒ある酒屋は町はづれになつてゐる。ある時小父さんは、何時もの晩酌を買ひにゆくのに、洋車にのつて行つた。店につくと拉車的(くるまひき)が、何時も乘る男だつたので、一杯のませてやつた。所が此の拉車的は、よほど酒に弱い男だつたと見えて、小父さんが未だ店を出ない間に醉つぱらひ、ぺロ〳〵唇をなめながら、店に居合せた他の連中を相手に、

「おい、俺ののせて來た青大人は、お前達あ知るまいが、日本の軍籍にあるお方で我が國でなら旅長（旅團長）に當るお方だ。俺は今、その青大人をおのせ申して來たんだ。どうだ、判つたか」

といつて管を卷いた。此の男は、青大人をのせて來た——といふ、たつたそれだけの事でも自慢だつたのである。

そんなわけで、藍靛廠近傍では誰一人知らぬ者なき小父さん達であつた。

今日は一つ思ひ切つて遠くまで歩かう……といふので、いつものやうに辨當を持

うた二人は、ずーつと隣村の、も一つ隣村の方まで、さびしいけれども伸びやかな遠足に出た。そして、こゝらでお辨當を……といふので或る木蔭で辨當を開きかけた。すると遠くの畑で働いてゐた百姓が之を見つけて、大聲で呼んだ。

「そこにござらつしやるのは青大人ぢやないか」

小父さんが「さうだ」と答へると、やがて仕事の手をとめて畑から上つて來た百姓は、何卒自分の家へ立ち寄つてお茶をのんで行つて呉れろ……といつて聞かなかつた。(こんな所にまで、俺を知つた者がゐる)きつと驚いたであらう小父さんは、訊いた。

「どうしてお前さん、わしのことを知つて居なさるのぢや」

「どうしてつて大人、あつしは大人の御近所の居酒屋へ、いつも一杯やりに行く、いはゞ常連でがす。でなくても、こゝらあたりで大人を知らない者なんて、一人だつて居るもんぢやござんせんよ」

斯うしたことを書きつづけてゐると、恐らく千頁の書物を書くことも容易であらう。まことに田園の素朴な人情の篤さ、そこには全く國境はないではないか。

四

然らば、何が斯くも青木の小父さん達に對し、藍靛廠を中心とする村閭の人々が、國境を超えた人情の篤さを示すに至つたか——といふことになると、問題はまた別である。

多年の顏馴染みといふこともあらう、同じ村閭の人といふ親しみもあらう、更に家庭の不和や喧嘩沙汰や、果は裁判沙汰にならうといふ事件にまで、双方が納得のいくやうな口を利いて貰つたといふ恩義もあらう。

けれども、もつと〳〵大きな原因は、青木の小父さん達の持つ人間的な、人格的な、品性の高さと、人に隔てをおかぬ溫情とが、招かずして村人の敬慕の的となるに至つたものといふべきであらう。

小父さん達には何の作爲もなかつた。作爲があつては、たとひ彼等の信望を克ち得ても、之を持して久しきを得ない。然るに小父さん達に對する村人の信望と崇敬とは、歳月を閲すること愈々多くして、益々高まりつゝあるのである。

小父さん達はまた、支那人を利用しようとか、之によつて如何しようとかいふ野心を持たない。唯裸の心と心の觸れ合ふまゝに、融然として、藍靛廠村裡に長い年月を送つて來た人である。

支那人の農民の中に融合してゆく樣なふりをして、自他共に「聖者」を氣どつてゐる者は、外國人の中には時々見受けられる。例へば歐米人の宣教師達である。けれ共、彼等はそれによつて衣食してゐて、無知朴直な支那農民を喰ひ物にしてゐることに於いては、殆んど支那の不在地主、土豪劣紳と軌を一つにしてゐる。

それに比べて、青木の小父さん小母さんの支那農民に於ける態度こそは、何とけ高く尊いことであらうか。

いま一度、あの運轉手に語らしめよう。

「青大人は、人格と學問とが高くて、親切である」

と。一面の識もなき一介の支那人運轉手にすら、斯くの如くに崇信される小父さんである。村人の崇信、何の不思議とするに足らうや。そして、その篤き村人の人情は、再び青大人を藍靛廠の村に引き戻したのである。

青大人、青木晉先生、そしてわれらの青木の小父さんは、今度自から文化事業總委員會を辭して、再び藍靛廠村裡の人となることとなつた。

恐らく本稿が讀者の眼にふれる頃、小父さんは、今は全く修理成つた舊居の窓から、遙かに萬壽山佛香閣のあたりを望みながら、

「婆さんや、やつぱりこゝは靜かでよかつたなあ」

と長鬚をしごき淨几をはなれ、玉杯を手にして居られることであらう。

村に歸つた青大人

一

西直門（シーチメン）を出て、植物園の前を過ぎ、其の塀に沿つて西北の大道を曲ると、その大道はずーつと運河に沿つて西北にと走る。

河の兩側には、二抱えにあまる楊柳が櫛のやうに並び、其の黄ばんだ影を清澄の河面におとす。

此の河は言ふまでもなく、こゝから更に藍靛廠を經て、萬壽山の昆明湖に通ずる。その昔、絶世の女傑よ、一代の明主よと、仰がれ謳はれし西太后の、遊覽の御座船が、ゆるやかに此の河を上下した榮華の跡は今たえて、晩秋の鈍い陽ざしに楊の葉のホロホロと散るのは、今に始まらぬ「國亡びて山河あり」の風景である。

斯くて進むこと暫くにして、われ等の眼前には延亙する萬壽山、玉泉山一帶のなだらかな山なみが現はれる。

見る限り、赧土と枯草の色。野も畑も、そして丘も小徑も。そして聞くものは颯颯と吹く金風（あきかぜ）の聲のみである。

やがて、われ等のゆく大道は、人家の群の中に引き入れられてゐるのを見る。河に網を入れて漁りをする人影、畑に牛を追ふ人影を見る。このあたりに到れば、白菜畑の青ずんだ色が、先づわれらの心を捕へる。

いよ〳〵人家に近づけば、鷄の聲、犬の聲。この一村こそは、さきに北京を去つた青大人こと、青木晉先生の住む村である。其の名を藍靛廠（ランテインチヤン）といふ。

村にさしかゝれば、さきの運河に架つた粗末な橋。そのたもとには「關帝廟」の朱壁。こゝ暫くは街道をはさんだ人家がつゞく。農家。そして其の間に、食物や布地を賣るらしい、商家もある。

家の前には鷄が豚と遊んで、その傍には、逞ましい犬が長く眠る。電車もない、自動車もない。有るはたゞ驢馬をつないだ鎌鋒馬車と、銀輪の光る洋車。その洋車でさへが、此のあたりには不似合な文明の匂ひを發散する。

鷄の聲が、澄んだ大空にひゞいて返つて來る、靜かな村。こゝは日本の宿場町に似てゐる。國木田獨歩の「町はづれ」のやうに、どこの軒下にも、町の角にも、やさしい、かなしい、なつかしい、かづ〳〵の昔のローマンスが秘められてゐる樣なところ。

赭土の荒壁に貼られた赤い紙は、北京ならぬ海甸（ハイデン）の町の呉服屋のビラ。この村は北京によるよりも、北京によつて衣食する海甸の町に寄生する町である。

所謂「文明」と絶緣された此の村に入つて、更に進むこと數町。われ等は道の左側に、黑い門扉と、墨痕鮮やかな「青木寓」の表札とを見出す。

これこそ、この藍靛廠一帶の支那農民から、「青大人（チンダーレン）」「青木爺（チンムーイエ）」と敬まはれ、慕はれる、われ等が「青木の小父さん」二度の寓居に外ならぬ。

北京を去つて、既に月餘。日本人の訪づれに接することなき小父さん、小母さんへの訪問の知らせは、門の傍にたれてゐる針金をひくことである。この針金は紐を以て、遙か家の奥までつながれ、奥の鈴を鳴らせる仕掛けになつてゐる。

來ることを保證されぬ訪容をあてに、土曜、日曜を樂しみ待つ小父さん小母さん。鈴の音を聞くや否や、とるものも取りあへず迎へに出てくれるであらう。

それは十月二十三日の日曜日の夕方。かつて青木の小父さん達が住んでゐた東方文化事業總委員會の一室に集まつた留學生九人。勝手な雜談の花を咲かせてゐた。すると誰かゞ、

「時に、青木の小父さんはどうしてるだらうなあ」

といつたのをきつかけにして、暫しは青木の小父さんが話題に上り、小父さんの人格や學問が一しきり思ひ出され、しまひには、其の小父さんを去らせた文化事業總委員會は全くなつちや居ない……といふ話にまでなつた。

ちやうど其の時である、今朝來何處へ行つてゐたのか姿を見せなかつた留學生のN——が、だし抜けに扉をあけて這入つて來た。

「いよう、何處へ行つてたんだい今頃まで」

時が時だけに、論客で而も對支文化事業のやり方に對しては、完膚なきまでに毒舌を弄するN――を迎へて、一同の好奇の眼が光る。

「青木の小父さんとこさ」

「エッ、藍靛廠へかい？」

「本當かい、一人でかい」

「小父さん、どうしてたい。小母さん、元氣かい」

「藍靛廠の家つて、どんなとこだい、いゝとこかい」

みんなの矢次ぎばやの質問に、眼をパチパチさせてゐたはN――は、凡そ次の樣なことをしやべつた。

私はいま、私の拙劣な說明を省略して、N――の話のまゝを玆に記錄し、さきの「村に歸へる青大人」の後をうけて「村に歸つた青大人」のプロフヰルを寫しておさうと思ふ。

以下は、其の日の日曜を藍靛廠の青大人訪問に送つた留學生N――の話です。

二

今朝、とても風がひどかつたらう。だから風間さんに電話したものゝ、おれ、本當は止めようかと思つたんだ。だけど此の前の日曜日にも、さうさ、射擊會のあつた日さ。あの日にもおれの行くのを待つてゐて呉れたことを聞いてるから、今日も亦がつかりさせちや申し譯ないつてわけで、とう〳〵出かけちやつたんだ。

買物に暇どつたから、西直門で待つてゐる筈の風間さんが、もう居ないんだよ。仕方がないから拉車的に命じて藍靛廠にやることにしたんだけど、門の前の車だから、城外のことなんか知りやしないんだ。

植物園の前を眞つ先ぐにゆきや、すぐに着くのを、わざ〳〵海甸へ廻りやがつたもんだから、三時間もかゝつて、向ふへ着いたら一時なのさ。

いゝところさ。みんな潮來へ行つたことがあるなら知つてるだらうが、本當だ、潮來の水境に似たところだ。いゝところだぜ。

おれ、本當のとこ、田舍だ〳〵と聞いてたから、赧土の百姓小舍だとばつかり思つてたんだよ。そしたら大違ひさ。北京とそんなに變らない、門扉のある堂々たる家なんだよ。

門の、さうだ左だ。例の引つぱると內の方で鈴が鳴るといふあの針金があるんだ。おれは、そんなものなあ引かなかつたね。

そーつと門を押すと、開いたから這入つた。何、家宅侵入だ、何だつていゝや。尤もおれの行くのを待つて、小父さん達あけて置いたんだつてさ。

門を這入ると、竹垣があるんだ。鷄がゐるんだ。うん、向ふへ行つても鷄や小鳥は飼つてるんだ。さうさ、毎日卵を生むんだつてさ。その世話が仲々大變ださうだ、こりや小母さんの話だ。

とても奧深い感じだな。屋敷の中には大きな樹が鬱蒼としてゐて、細長い敷石の上に落葉が散つて、それが有るかなしかの風にカサカサ鳴つて……、どうだい詩人だらう。そして懸樋の音でも聞えて來ようといふ——本當は聞えなかつたが、兎に角さういつた靜寂境さ。

そんなんだから、中に人がゐるんだか居ないんだか分りやしないんだ。いゝかげん行くと、右側に一寸した門があるんだ。ヌッと覗くと、小母さんがひとりで煤球(まあた)兒(ん)をおこしてるんだ。小母さんの背中で樹の葉の影がおどつてゐたつけ。

「小母さあん」

と聲をかけたら、小母さん、まあ——つてわけで、心待ちしてゐたくせに吃驚してゐるんだ。

「あ、來た〳〵。待つたぞ〳〵」

院子(には)の樹の中で、小父さんと風間さんの聲がした。

よろこんで呉れたつけ。おれ、北京に來てから、人に歡迎された覺えのない男だが、全く來てよかつたと思つた。うれしかつたよ。

小父さん達の家、とても古びてゐるんだよ。おれの田舍の鎭守の社みたいなんだ。そして院子には樹が一ぱい。そして小鳥の籠が、そこ〻に懸つて、い〻なあ、あんなとこ。

けれども家の中は、壁も天井も、みんな貼りかへてあるから、とても綺麗で、とても明るいんだ。

三間房子の西の、一廓は小父さんの書齋だ。中の一間には、眞中にストーブを置いて、椅子をおいて。そこに小父さんと風間さんが、俺のゆくまで、天下國家を論じてたんだな、きつと。

東の一廓が、居間兼寢室になつてゐるらしかつた。外から、窓ぎわに置かれた謠曲の本が見えてたつけ。

何しろ南向きで、街道からは遠く引込んでゐるし、新しい障子一ぱいに陽があたつてゐるんだもの、靜かで、明るくつて。聞えるのは、院子の樹々の枝が風にゆらぐのと、葉もれ陽に啼く小鳥の聲だもの……。

い〻ぜ。おれ、俄然決心しちやつた、お嫁さん貰つたら一年か二年あそこへ行つて、浮世はなれたスキート・ホームを作らうとね。ハハハハ、ざまあ看看——だ。

小母さんも言つてたよ。

「私どもでは駄目ですけれど、お若い新婚の方が、たつた二人つきりの生活をなさるのにはもつて來いの所です」

つてね。あ〻、おれも早く「お若い新婚の方」にならう……と。

何、小父さん。元氣さ、さう周章てなさんな、追々に言ふよ。つまりそんな家なんだ。そこで、俺も着いたから、午飯をくふ勘定だ。

風間さん、酒を下げて行つたし、おれは牛肉三貫目、……殘つたら小父さん達に

味噌漬にさせようと思つたんだ、それもちやんと家の厨夫に命じて料理させて持つていつたから手がかゝらない。それで直ぐすき燒を始めながら、みんなで種んな話をしたんだ。

いろんな話さ。これから、それを話すんだよ。まあ聞いてろ。

小父さんは、毎日勉强してる。こりや仕方がないさ。その上、小父さん、勞働が增えたといつてた。

院子に井戸があつて、其の水汲みを小父さんがやつてる。風呂の水、炊事の水、それを汲むことなのさ。そして、小母さんと二人で、鷄や小鳥の世話なんだ。

單調。單調かも知れないが、靜かな生活さね。おれ達の仲間のやうに、誰が何處の教授にならうと、學位をとらうと、誰がどんな偉い論文を書かうと、著述をしようとだ、こゝへ行つたら、そんなものあ、破れた草履みたいに權威のない話題なんだ、どうだ驚いたか。

おれも、しみ〴〵考へたんだ。何、柄にもないつて。何いつてやがんで。物のあわれは秋こそまされさ。君子儒の心裡は、お前たちみたいな小人儒の覗ひ知る所にあらずさ。つまりおれは、小父さんの生活を見てゐるうちに、自分自身のつまらないことが、よく分つて來たんだ。

俺でさへさうだ、と言つちや言ひ過ぎかな。まあいゝ。そいつたわけで、人と世と互に相わすれた大自然の生活といふものは、おれたち俗人の生活を、完全に否定するらしいよ。

三

だからさ、さうした大自然の中に、土の生活つてことさ。トルストイや德富蘆花や、青木の小父さん達のあんな風な生活の、どんなに素晴らしいものか——つてことを、おれ、しみ〴〵考へたんだよ。といつて、おれは中學生のセンチメンタルで言つてるんぢやないぜ、全くの話が。

ところでだ。小父さんは言つたぜ、

「暫く北京づとめをしたお蔭で、まださつぱり世の中を忘れる所まで行かない」つてね。それだから、一日に一度、しかも不定期に配達される郵便が待ち遠くて、小父さんも小母さんも、日に何度となく門のところの受信箱を見にゆくんだつて。

小母さんかい。小母さんも北京にゐた頃とちがつて、すつかり老けちやつたね。

「斯うして田舍へ引こんで來て、生活の上にも精神の上にも、何の不平も不滿もなく暮してゐますが、積極的な喜びや樂しみがないだけに、訪ねて下さる北京からのお客樣が、とても待ちどほくて……」

何のことか分るかい、北京の若い奴等よ、こんな所に集つて無駄口叩いてゐないで、日曜日には遊びに來い——といふことだ。どうだ分つたかい。

それでも小母さん、すつかり健康になつて血色もよかつた。北京ぢや、よく病氣した小母さんだつたがねえ。

小父さん、小母さん、毎晩謠曲をうなるんだつてさ。ところがね、小父さん達の謠曲を、始めて聞いた家主の親爺がね、

「青大人のやつてゐるあれは、佛敎のお經か」

と聞いだんだつて。お經はよかつたがね。よせばいゝのに小父さん、說明するのが面倒なもんだから、さうだ〳〵といつたらしいんだ。すると家主の親爺、すつかり感心してしまつて、

「青大人夫妻は實に信仰深くて、大人も太太も毎晩嚴重におつとめをして、一日と雖も怠ることがない」

といふわけで、村の誰れ彼れをつかまへては、吹聽してしまつたんだよ。

斯んなことだつたら、あの時によく說明して置くんだつた——なんていつたつてもうあとのまつりさ。

「日本人つてものは、何て三天半的新鮮なんだらう」

と言はれまいために、毎晩、本當のおつとめのつもりで「さんぞうろ」をやつてるんださうだ。日本人の名譽のためにね。

そんな有樣だから、人の訪ねて來るのを待つ情には切なるものがあるんだ。こないだも土曜、日曜でない日に、同仁病院の名取さんの奥さんが見えたつてんで、思ひがけなかつただけに、とても嬉しかつたらしいんだ。何べんも〳〵も繰り返して其の事を話してた。

小母さんと二人で、裏門から出るとね、もう外は見る限りの畑さ、丘さ。そして崩れかけた荒壁さ。畑の中に何廟か知らぬが、さうか、あれが關帝廟か、とに角其の廟の壁が赧かつた。水の涸れた川床で、枯草まみれになつた大きな豚がねてゐた。

村人はのんびりしてゐて太古の民の、おもかげがあるし、空はよく晴れてゐるし、おれなんか、もともと北京を都會だなんて思つてゐなかつたんだが、あそこへゆくと、北京だつて立派な文明の大都會だつてことが、はつきり分るんだよ。

一度いつておいでよ。みんなに「よろしく」つてことだつたぜ。土曜、日曜は外に出ないで、北京から誰かゞ來るだらうと待つてゐるんだ。こんどの日曜にゆくんだね。もつと、外に聞きたいこと、あるかい。

四

さう語り終つた留學生N――は、つめたくなつた紅茶々碗をとり上げた。そして、

「荻窪みたいなんだ、藍靛廠は……」

日本を思ひ出したのか、今日行つて來たばかりの藍靛廠を思ひ出したのか、さう言つて默つた。

窓外には、肅々と迫る冷氣とともに、もう星のつめたい瞬きが、のぞき込んで來てゐた。

「寒くなつたねえ、小父さん達ストーブ焚いてゐたつけ」

N――にさう言はれて、みんなは今更のやうに冬の迫つたことを感じた。

まこと、吹くよ秋風佛香閣に。北京の冬は萬壽山から來る。青木の小父さん達の住む藍靛廠は、北京よりも、冬の訪づれが早いかも知れぬ。

附記

「村に歸へる青大人」は、昭和七年九月二十八日から五回に亘り、「村に歸つた青大人」は十一月一日から四回に亘り、いづれも北京の邦字紙「新支那」に連載し、倖せにも讀者の拍手をうけた。

青大人、青木先生は、支那事變の直前、その半生以上の支那生活をうちきつて歸、朝、上京せられた。先生の歸國を、北京西郊の農民達がどんなに惜しみ悲しんだかといふことは、筆者が、事變後の北支出張の際に、同地の地方民から直接に聞かせられた所であるが、北京西郊一帶の人間は、何れも、

「青大人が歸つたから、こんな事變が起つた。青大人さへ居て呉れたら、此の樣な事變は起らなかつたらうに」

と、今日もなほ本氣で考へたり、言つたりしてゐるさうである。

既に文中にも指摘しておいたが、外國人にして支那民衆の信望を博してゐる者は相當にある。けれども其の何れを見ても、皆、何等か爲にする下心を持つて、自から信望を博さうといふ徒ばかりであつて、眞に支那民衆の中に融け込んで行つてゐる人、青木先生の如きを見ないのである。

自から作爲して招いた好評信望は、時日の經過と共に其の鍍金をはがれる。ましてや、好餌麗句を以て支那民衆を釣り、之によつて私し、却つて支那民衆を喰ひ物にする徒に於てをや——と、筆者は言ひたい。

支那事變勃發の當時、彼の直譯的基督教の僞道德を振りかざし、身心共に米英化せし人間が、「支那街の聖人」よ、「北京の聖者」よと、自他共に誇示し、ジャーナリズムのひく糸に踊つた僭上無禮は、恐らく讀者の記憶の一隅にも殘つてゐることであらう。而も今日如何。

これを、青木先生が、其の支那民衆の中にあり、日を遂ひ年を重ねて二十年。而も彼等の先生に寄せる信頼敬慕の愈〻加はり、先生去つて六年、未だに其の人格の思慕せられつゝあるのに比べて如何。

筆者は、支那民衆の中に這入つて生活する日本人、並に大衆の組織化や宣撫に携はる日本人にとつて、最も必要なのは此の點に關する反省であらうと思ふ者である。

北京留學生覺書

一

原さんといふ三十男の留學生があつた。ちやうど陰曆の正月元旦に、北京に古い橋川さんといふ人の家へ遊びに行つた。

客廳に通されると、阿媽が茶を持つて這入つて來た。原さんは支那語に自信の有る人だから、直ぐに其の阿媽に話しかけた。恰度元旦の事だつたから、

『お前こんどで幾つになつたんだい』

そいつて原さんが訊くと、阿媽はニッコリ笑つて答へた。

『三十六でございますよ、旦那樣』

そこで原さんは言つた。

『さうかい、お前案外若いんだね。俺は今年三十二だよ』

そしたら、今まで愛嬌たつぷりだつた阿媽が眞赧になり、

『戯談いつちやいけません』

と憤然として言ふや否や、バタンと扉をしめて、血相かへて出て行つてしまつた。

原さん、吃驚して眼をパチクリしてゐると、主人の橋川さんがニヤ〳〵しながら這入つて來て、

『うちの阿媽なんかにプロポーズしてはいけませんぜ』

といつて笑つた。

原さん、未だ何が何だか判らない。すると橋川さんは惡戯さうな眼で笑ひながら、

『支那の婦人に年齢を聞いて、それに近い自分の年齢を告げるのは、その婦人に言ひ寄つたことになるんですよ。殊に男の方が二つとか四つとか年下になると絶好の條件が備つたことでしてね。うちの今の阿媽も、原さんに言ひ寄られたんだと思つたんですね、可哀さうにブル〳〵ふるへて居ましたよ』

といつた。原さん「とんでもない言ひがゝりだ」と、いつもの癖の蛸の樣に口を尖らすことも忘れ、たゞ赤面するばかりだつた。

二

原さんと阿媽の話――の出た或る席で、同じく留學生の森口君の話が出た。森口君は當時二十三の若さで、四十男に互して勉強してゐた紅顔の青年だつた。

森口君は其の頃、六人の家庭教師をとつて專ら語學の勉強をしてゐた。所が其の家庭教師の中に、王といふ妙齡の時髦女郎（モダンガール）が居つた。

何しろ森口君が若くて眞面目な青年なので、王といふ其の女教師も尠からぬ好意を寄せて、ネクタイだの、切り花だの、種んなものを森口君の部屋に持ち込んで來たものである。

所がある寒い日。戸外は零下三〇度、いくらストーブを焚いてもゾク〳〵寒い其の日。妙なことに此の女教師、

『何だか體がカッ〳〵と暑くつて』

と言ひ言ひした。そこで森口君、

『斯んな寒い日に暑いなんて、一體どうしたんです』

眞面目な青年だけに伺ひを立てゝみた。すると、

『着物を斯んなに着てるからですわ』

と言ふなり、クルッと着物の裾を捲つて褲子（ズロース）まで見せたのである。

（變なことをする女だな）

森口君は、其の夜先輩の杉村さんに此の話をした。すると、杉村さんも亦ニヤニヤしながら、

『それで君はどうしたんだい』

『どうもしません』

『なんだ、それつきりか。それはね、その女の先生、君に思召があつたんだよ。支那の女が男に褲子を見せるのは、日本で言へば帶紐を解くといふ所だな』

これを傍で聞いてゐた、寺川さんといふ四十男の留學生は、

『どうも今どきの若い人は意苦地がなくていけませんな。そんなにまで持ちかけられてゐ乍ら、敵に後を見せるなんて。それが私だつたら……』

と、切齒扼腕したものである。

『僕だつて、それがそうだと知つてさへ居たら……』

と、森口は、あとでコッソリ筆者に言つた。

三

鈴木君といふ留學生が有つた。北京の目貫の王府井大街を、東安市場の方へ歩いてゆくと、毎日學校で敎はつてゐる孫——先生に會つた。

先生は北京大學の外に、清華大學にも、女子師範大學にも、敎鞭をとつてゐる、現代支那第一流の國學者——日本語でなら漢學者——なのである。尊敬すべき碩學鴻儒なのである。

立ちどまつた鈴木君が、支那式に兩掌を合せて上下にうち振り〳〵、最上の敬意を表してゐると、傍に寄つて來た孫——先生は、何時に似ぬ上々の機嫌で、

『おゝ、いゝ所で出會つたものだ。君は儂を見て、平常の儂とちがつてゐるとは思はないかね』

と言ふのである。驚いた鈴木君、孫——先生を見上げ、見下した末、別に變つた所もないものだから、

『いや、別にお變りになつてるとも見えませんが』

といふと、孫——先生、がつかりした樣に、

『さうか。變つた樣に見えないかねえ』

といつて肩を落した。鈴木君も何だか心配になり、

『どうかなさつたんでせうか』

と伺ふと、先生急に氣をとり直したのか、

『實はね、儂は今日、風呂に這入りましたんぢや』

と、大威張りであつた。

大學の先生でこれである。一般の支那人が風呂に這入らぬのは本當らしい。日本の支那通方がよく、

『支那人は一生に三度より風呂に這入らぬ。生れた時の生湯が一度。結婚の前日に一度。死んで湯灌が一度と。都合三度、これだけより風呂に這入らぬのぢや』

などと仰有る出鱈目の出處は、こんな所にあるものらしい。

四

熊田さんといふ留學生があつた。既に不惑を過ぎた年齡で、志を立てゝ北京に來たゞけに、支那語の一二三の勉强にも相當手間がかゝつて、一年半ばかりして、漸く日本人の下宿を拂つて「公寓」へ移つていつた。

公寓といふのは、北方で發生したもので、日本で言へば下宿屋、氣どつて言へばアパートに相當するものである。中華公寓、北京公寓、迎賢公寓、尙賢公寓、燕京公寓、大興公寓等々、大なるは百人、二百人を收容するものから、小は十人、十五人のものまで、學校街を中心に枚擧にいとまのない夥しい數である。

ところで、招君公寓といふのに移つた熊田さんである。折角支那に留學したんだから、支那人の中で生活して見ようといふ殊勝な氣持で、公寓生活をはじめて見て驚いた。

何がさて、北京で公寓生活をやつてゐる者は、大低故里を去つて遠き青年男女である。さうした青年男女が、男は女を、女は男を、引き入れて享樂を恣にする場所、それが公寓であつたのである。

而もそれがどの部屋も、どの部屋もといふわけで、わが熊田さん、壁紙一枚で仕切られた兩方の部屋の、さうした物騷がしさを聞かせられてゐる中に、とう〳〵神經衰弱になり、半月ばかりの間に四貫目も體重が減つてしまつた。

『どうも公寓はいけません。紙一枚を透して、あの喋々喃々を聞く位ならまだい

いとして、私の居た部屋なんか、それが方々破れてゐるのですから……』

再び日本人の下宿に舞ひ戻つた熊田さんは、訪ねて來る留學生仲間の顏を見る毎にさういつて、中老に這入つたいい年齡の癖に、その都度赤面をしたことである。

五

熊田さんと殆んど同時に、公寓生活をはじめた山野君といふ留學生は、これまた公寓のエロに參つて、東單牌樓の傍の日本人村へ逃げ戻つて來た。

山野君の這入つた公寓は、北京大學の近所で客は殆んど男子大學生ばかりであつた。所が、山野君が其の公寓に移つた晩に、扉を排して這入つて來た客があつた。

『何してらつしやるの』

といふ聲にふり反つて見ると、例の斷髮にハイヒール、おまけに濃い化粧をして、唇が煽情的なルージュに濡れてゐる……といつた頗る美人である。

素より一面識もない相手だから、山野君、さては部屋を間違へたのだなと思つてゐると、彼女は婉然として片手を差出した。人違ひではないらしい。

狐につまゝれた樣な氣持でさし出した山野君の手を握つた彼女は、キウ〳〵と三度も握り締めたのである。

山野君、何が何だか分らぬものゝ、こんな美人から握手を求められるなんていふことは、恐らく生れて初めてゞあつたらしい。嬉しまぎれに、自分の方からも彼女の手をキウキウと二度まで握り返したものである。

すると、彼女は這入つて來た時とは全で反對、ツンとして、心殘りの山野君を部屋にのこしたまゝさつさと出て行つてしまつたが、間もなく隣りの部屋から男女の樂しい語らひの聲がきこゑ、女の聲はまさしく、さつきの美人の聲である……。

さあ、これを聞いた留學生連の元締め福本君は、尙も其の美人の魅惑的だつた容貌を忘れかぬ、女神の樣に思つてゐる山野君に、

『そりや君、暗面子（ストリート・ガール）なんだよ。君がそんなに氣に入つたんなら一度握りかへせば

よかつたんだ。といふのね、彼女の握手が物言つてるんだ。つまり行、不、行（いいの、わるいの）といふわけで三つ握り締めたのさ。それを君が一つ、行（よし）と握り返せばいゝ所を、不行（いかん）と二つも握り返したから出ていつたんだよ。よく覺えて置いて、此の次からは、そんなへマはやらないことだな』

と、どこにでもよくない先輩は居るもので、懇々と敎へてやつた。けれ共山野君が日本人村へ戻つて來た所を見ると、其の後此の智識を發揮する機會に惠まれなかつたものらしい。

六

留學生十人許りで、張家口見物にいつたことがある。當時は未だ領事館員の外に、日本人といへば、日本人旅館一軒といふ張家口であつた。

その宿に旅裝を解いた面々は、北京では日本人の口の端をはゞかつて、立寄つても見なかつた……といふ花街見物に練り出していつた。

牛太郎が出て來て、馴染みが有るかと問ひ、無いと答へると、「見客（チエンコー）」と吐鳴る。するとゾロ〳〵部屋の外に妓達の足音がして、月妃とか、梅玉とか、李香とか、牛太郎の呼ぶにつれて、部屋の入口に一人づゝ姿を現はす。

ものゝ十人も出て來ると、それで顏見せが終り、牛太郎が、どの妓を呼ぶかといふ。所が支那に關する限り、口八丁手八丁の連中も、次から次へと現はれる妓達に見とれてゐて、其の名前なんて覺えてゐるのは一人もない。すると、一行の中で最も支那語の拙い寺川さんが、

『李香といふ妓にしようと欲する』

そこは最年長だけに判然りと自分の相手を決めてしまつたものである。他の連中、支那語の拙い寺川さんに鮮やかにしてやられ、呆氣にとられて宿に引上げて來た。

けれども後に殘して來た寺川さんのことを考へて、あの語學で大丈夫用が足りるかどうか、餘計なことを心配してゐる。

所が案ずるより生むが安く、翌朝になると寺川さん颯爽と宿へ歸つて來たので、一行の面面、

『昨夜は貴君に鮮やかに一本やられましたよ。して、貴君の言葉で相手によく通じましたね』

と、口惜しまぎれに失禮なことを言ふと、寺川さんすましたもので、

『なあに、支那語が出來なくても、それはもうヘッヘッヘッヘ萬國共通でしたよ』

とばかり、幇間の樣に、自分で自分の額を叩いて見せたことである。

七

結婚して十年、三人の子供までである夫婦の中でさへ、主人の留學中に、奥さんが外の男とドロンしてしまつたといふやうな話は、ザラとまではゆかずとも少くない。これが夫婦に到らぬ許婚や戀人を日本に置いて來てゐる若い留學生になると、許婚が他へ嫁いでしまつたり、泣いて別れた戀人が自分の友達と戀をしたりETC……

となつて、祖國を去つた遙か萬里の異鄕に人知れぬ涙を流してるといふ話が多い。中でも、鈴本君が出會つたのなどは、全く「氣の毒」を繪にかいた樣な話である。

日本で英語敎育界の元老で三河一喜といへば誰でも知つてゐる老先生が、夫人帶同で支那漫遊をして、北京にも立寄られた。そこで、北京見物の案內を仰せ付かつた鈴本君が、止せばよいのに、そこは靑年の人のよさで、老夫人の命を畏こみ、馴れない身で、前門外の八大胡同の案內までしてしまつた。八大胡同といふのは、北京の花街のことである。

所が、老夫人は非常な名文家であつたから叶はない、長谷村雨女史主宰の「婦人藝術」といふ雜誌に、老夫人の手になる「北京花街素見記」なる一文が出て、それによると、

『案內をして下さつた留學生の鈴本さんは、此の方の通人で、普通の人の案內では分らない所まで、餘す所なく私達は見せて貰ふことが出來たのざァます』

といふ譯で、鈴本君、北京花街の通人になつてしまつたのである。

此の雜誌が出て半年。鈴本君は日本に殘して來た戀人が、他へ嫁いでいつたといふ消息をきいた。幸か不幸か、彼女が「婦人藝術」の愛讀者であつたといふことも。

『君達、けつして日本から來た旅行者の案内を引きうけるんぢやないよ』

後輩の若い留學生の顏を見る度に、さう言ひ言ひする鈴本君は、何故日本の旅行者の案内を引受けるといけないかを語りはしなかつたが。

三河夫人も隨分罪なことをしたものである。

八

吉田君といふ留學生は、同じ大學から來た倉井君と一緒に、支那人町に住んで、支那人そつくりの生活をして居つたが、この二人は支那に傾倒すること甚しいもので、口癖の「我が國に於いては……」といふ我が國といふのは、この二人にとつては、支那のことで、日本のことを「貴國、貴國」といふ、病も膏肓に入つた同化振りで、

『日本人の風下にも置けない野郎だ……』

などと、血の氣の多い連中からは、大いに睨まれ、うつかりすると頭の皿をとりかへなければならぬかといふ、一歩手前までは何べんも行つた男だつた。

それでも、此の二人は、日本へ歸つた時のことを、

『貴國へ行つて大學の教壇に立つ時には……』

支那服を着て、支那帽子をかぶつて、支那靴を穿いて、支那語で講義するんだ——といつて、一生懸命勉强をして居つたから、支那の學問や支那語の進境は、著しいものがあつた。

ちやうど、年の暮の、北京の學生達は、男も女も、北海公園や中南海のスケートリンクにスケートに通ふのを日課にしてゐる頃。日本の留學生もスケート熱にうかされ、留學生ではないが、その元締め格で、年も相當の年配になつてゐた杉村さん

まで、スケート靴を首にかけて、北海通ひをはじめた。

さあ斯うなると、スケートをやらぬのは吉田君だけとなつた。そこで、よせばよいのに、物好きな鈴本君が、吉田君を誘ひにいつた。すると吉田君の言ふのに、

『私しや、弊國（わたしのくに）の學者がしなかつたことはやらんつもりです』

『？……』

『鄭玄先生は、溜冰（スケート）なんてやりませなんださかいなあ』

鄭玄といふのは、有名な前漢の學者である。鈴本君、引き下るより外はなかつた。

その後、古人の詩に「溜冰行」といつて、氷すべりを詠つた詩のあるのを發見した鈴本君は大いに喜び、吉田君をやりこめたいと思つたが、もう其の時には吉田君、少し前に歸朝した倉井君と共に、支那帽子、支那服、支那靴の姿も嚴めしく、支那語で講義をして、母校の後輩學生を盛んに惱ませてゐる——との風の便りであつた。

或る日本婦人の話

一

それは昭和七年の十一月の初めだつた。筆者は北京東四牌樓（トンスーパイロウ）の傍の寓居に、或る見知らぬ若い婦人の來訪をうけた。その婦人は、筆者が其の頃、「北京新聞」に連載して居つた『日本婦人と支那人との結婚に就いて』といふ、日支結婚反對の拙文を讀んで共鳴した者だと斷つて、其の婦人が自から見聞した一人の氣の毒な日本婦人の話をして呉れた。その話に切々として胸をうたれた筆者は、早速これを「實話物語」に書き下さうとして筆を執り、書く後から「新支那」といふ邦字新聞に「日支親善の人柱となつた、女子大出の太田春江さん」と題して十一月十五日から一週間に亘つて連載させたのである。不慣れな書き物であつた爲に、全然失敗であつたと思ふが、中に書かれた事實には毫末の嘘もなかつたつもりである。

便宜上、文章は其の婦人の記述といふ形になし、出て來る人名は何れも現存實在の人達なので、其の迷惑を慮つて假名としてある。「誰が斯んなものを書いたか」などいふ人があつた爲、發表の時には、之また便宜上「嵯峨砂代」といふ女の名を用ゐた。（探すなよ）に通ずるものとは、知る人は知つて居つた筈である。

因みに、支那人の妻となつてゐる日本婦人が、北京だけで當時三百名もあり、其の殆んど全てが、尠くとも幸福な境涯には居なかつた——といふ事實を附言して置きたい。

二

北京に着いて、初めて手を握つた人。今から思へば水關兒の火車站（ていしゃは）に迎へて呉れた、たつた一人の知友。それが春江さんだつた。

春江さんと私とは、同じ昭和三年の家政科出身、切つても切れない同窓の、而も同級生であつたから、本來ならば私共は、たとひ無二とまではゆかなくとも、相當親しい交りがあつてよかつた筈である。

けれども、私共は卒業以來一片の文通もしたことがなかつた。それには理由があ

つた。

春江さんは、さる北國の豪家の二番娘で、いはゞ「お乳母日傘」の我儘一杯に育てられて來てゐる、普通女子大の門をくゞる娘の誰ものやうな境遇の人ではあつたけれど、やつぱり田舍くさい娘さんで、其の小柄で華奢な體と、緣なしの眼鏡の裡に輝く聰明な瞳の持主ではあつたけれども、着物の好みや着付けがとても野暮くさくつて、どうみても田舍の小學校の女敎員により見えなかつた。

今から思へばすまないことだつたけれど、私達は斯うした春江さんを心の中でいつも輕蔑してゐた。

これは、ひとり私達や私達のグルッペが惡いのではなしに、女學部からずつと上つて來た者と、豫科から上る田舍出のひと達との間が、常に水と油とのやうに融け合ふことの出來ない、女子大の傳統がさせた意地惡だつたと言へる。

そして、どんな場合にでも女學部出身のものゝ幅が利いて、さうでない春江さんのやうな地方出のひと達は、ちやうど水の上の油のやうに、みんなに容れられることなく、而も俄かの都會生活から來るケバ〳〵しさから、ギラ〳〵卑しく光つてゐるにすぎなかつた。

そんなわけで、私は春江さんと在學中から言葉を交したこともほんの稀で、毎週の反省會の時など、春江さんのしやべる尻上りの東京辯のアクセントが可笑しくて、故意に吹き出し、みんなを哄笑の渦の中に引き込む役目を果すのが、いつも此の私だつた。

その私が北京へ來ることに極つた時、誰一人知人のない北京。同窓會名簿を繰つてみても、知つた人といへばたつた一人の春江さんより無いと知つた時、そして春江さんへ宛てて出迎懇願の手紙を書きながら、私は、

「斯んなことなら、在學中から、も少し親しく、さうでなくても、せめて卒業してから年賀狀位出しておくのだつた」

と私かに悔んでゐた。

けれども春江さんは、それは迚もよろこんで、私の出迎えを承諾して呉れたばかりでなく、宿の世話、語學教師の世話、買物の世話、ありとあらゆる私の世話を、一手に引きうけて呉れた。

北京に着いたのが八月二十五日、もう北京は秋だつた。出迎へて呉れた春江さんは、可愛い赤ちやんを抱いたマダムだつた。

「太田さん、有難う、すまなかつたわね」

「いゝのよ、どつちみち遊んでゐるんだから……」

彼女はさう言つて梨の花のやうに、さびしく笑つた。その笑顔には氣のせいか、妙にすきとほつた妖しい輝きがあつた。

けれども私は、彼女の昔に變らぬレディメードらしいダブ〳〵した洋裝に、昔のまゝの彼女を發見して、何となく微笑ましい氣持になつた。

私は春江さんに連れられて、其の日からのねぐらである中央飯店といふホテルに行つた。

部屋に落ちつくと、私たちはやつとのんびりした氣持を取り戻した。

「支那つて汚いところでせう」

「さうでもないわ。でも塘沽つて言つたわね、あそこへ着いた時は吃驚したわよ」

「さうでせう。あたしの來た時もさうだつたわ。歸らうかと思つたわ、その儘。時に此のお部屋の感じは如何」

「いゝわね」

「支那のホテルだから、南京蟲がゐるかも知れないけど……」

「南京蟲くらゐ平氣よ。あたしは留置場で馴れてるんだから……」

「まあ、ぢや、いつかそんな噂をきいたのはやつぱり本當だつたのね」

「モチ！」

何の羞恥もなくさう言つたものの、私にはすつかりマダム〳〵した春江さんの落ちつきに比べて、自分の下素な蓮ッ葉さが、妙に恥ぢられた。

（でも致方がない。此の人と私とは世界がちがふんだから）

強いてさう思ふと、私は言つた。

「其の後あなたの方は如何。御主人は張さんだつたかしら、常さんだつたかしら」

「常よ。チャンつていふの」

「さう。やつぱり大學の先生してらつしやるの」

「えゝ。でも駄目よ。いま病氣してるんですもの」

「あら、さう。そりやいけないわね。赤ちやんはお一人つきりなの」

「いゝえ。この上が一人あつたの。亡くなつちやつたの、去年の、夏だつたわ」

心なしか、彼女の頰をさつと寂しい陰影が流れて過ぎた。

「さう、ちつとも知らなかつたわ。その後御幸福だとばつかり思つてたけれど……」

うなだれた春江さんの肩が小刻みに震へてゐた。そして私がさう言ひかけると、

「まあ嵯峨さん、あたしが幸福だなんて、始めつから、ちつとも幸福ぢやなかつたの。ずゐぶんあたしは苦勞したわ。悲しかつたわ。でも支那人の妻であるあたしに、それを訴へる所は何處にも無かつたの……」

春江さんの長いまつげがうるんで、蒼白の面にほつれ毛が寒かつた。私より一つ上だから二十六歳である筈の春江さんの容姿は、もう三十をすぎた人のやうに疲れきつてゐた。

「さう。あたし停車場で一目見たとき、何か、そんな豫想がしないぢやなかつたわ。ぢや、いまのあなたは、そんなに幸福ぢやないのね……」

赤ん坊は眠つてゐた。私は椅子を寄せると、春江さんの肩――げつそりと痩せてゐた――に手を置いた。

淺薄なセンチメンタリズム、かも知れない。けれども秋は旅びとを詩人にする。

殊に見も知らぬ北京の地に、たつた一人の友達である春江さんの不幸に觸れた私は、ついしんみりと引き入れられて、此の小柄な年上の友の上がいとほしまれた。

「ごめんなさい。久しぶりでお目にかゝつて、すぐに斯んなことをお耳に入れて……」

やゝあつて、面をあげた春江さんは、强いて微笑んだつもりらしかつたが、その微笑みは硬直して、彼女のやつれた小さな顏を、殊更に醜くひきゆがめたに過ぎなかつた。

「いゝえ、いゝのよ〳〵」

私も何となく、久し振りにしほらしい氣持になつて、彼女は慰めるために心からさう言つた。

女學部時代から妙に僞惡振つたことが好きで、其の上「頭がいゝ女」といはれたい虛榮心も加はつて、分りもしない社會問題の研究にかぶれ、さうした運動をする男達の中でも、

「彼奴はイットだ」

と蔭口を叩かれ、自分でもHEでもSHEでもない中性のITだと思ひ込んで、あたら娘ざかり、嫁入りざかりを、自他共に白い眼で見たり見られたりして來た私ではあつたが、事の春江さんに關する限りは、自分でも忘れてゐた「をんならしさ」、「しほらしさ」でつき合ふことが出來るやうになつた。

このことの幸か不幸かは、私には未だ分らないけれども、北京に來てからの大きなめつけものだと、今でも考へられてならない。

三

春江さんは、學校を出ると直ぐ、當時東京帝大の哲學科を卒業した常さんといふ支那留學生と結婚した。

女子の高等教育の普及した今日、女子大出だからといつて、そんなにお高くとま

つてい、などゝは夢にも思はないけれど、地方の豪家の娘さんである春江さん。都會育ちの私達の眼にこそ田舍くさいひとだつたけれど、嫁にゆくにも壻をとるにも、さう不自由のある筈のない春江さんが、何を選りに選つて支那人の妻になる必要があつたであらう。

「太田さんも物好きぬ」

「何も支那人のお嫁さんにならなくつなつてねえ」

「でも支那のお壻さんは、お嫁さんを大切にするつていふわよ」

「ぢや、お壻さんのサービスがいゝのかしら」

「いくらサービスがよくつたつて……」

と春江さんを批難した、今の松岡男爵夫人の薫子さん、吉井化粧品の松代さん達の、淫らな噂話に交つて、

（さうだ、別に支那人のお嫁さんにならなくつたつて……）

と、平生口にする生半可な主張とは、全然反對のことを考へた私だつた。

けれども、春江さんの不幸が、其の支那留學生常衡さんとの結婚に始まつたとしたら、そしてその不幸が、ひとり常夫人となつた春江さんだけの辿つた道ではなくして、支那人と結婚した日本婦人の、殆んど全部が味はねばならない苦惱だと知つたら、日本にゐて日本の新聞記事を種に議論してゐる支那通や、日支親善論者たちが言ふやうに、「日本婦人と支那人との結婚による兩國民の結合」なんて、とんだ誤謬にあやまられない爲にも、私達は一つの反省を餘儀なくさせられる。

ひとり春江さんの事だからといふだけではない。他人の私事に關して、殊に他人の戀愛問題に關して、飽くまでも追求してゆかうとするジャーナリズムの好奇を私はさけよう。

けれども、讀者も春江さんも許して下さるであらう。

北京に於けるたつた一人の友、春江さんの不幸を取り上げ、春江さんの辿つた道

を書く今の私は、世の平凡な女のひとりとして、他の同性と共に一つの反省を反省することゝ、世の所謂「日支親善屋」に對して、抗議したくて堪まらないものを持つてゐるからである。

四

春江さんの戀人、常さんは溫厚な好學の青年だつた。北京大學を卒業すると東京に留學して、心理學の勉强をしてゐた內氣な青年だつた。

春江さんが常さんを知つた時には、大學を卒業しようとしてゐた常さんの日本語は、非常にレファインされた東京語だつた。

春江さんが常さんの何處を好き、常さんが春江さんの何處を愛したのか、固より私はそれを知らぬ。けれども二人は戀人同志になつてゐた。

春江さんの國境を越えた戀。殊に雪國の女は情熱家だといふ。あの緣なしの眼鏡に理智を裝つてはゐても、春江さんは情に燃へ易い北國の女だつた。身も魂も、だいちにんの常さんに捧げつくした彼女。

常さんは神田の日華學會にゐた。そして春江さんに會ひに行つた。

常さんの溫厚な人柄に好意を寄せた日本の人々。殊に日華學會の內堀さんや服部女史が、この國境を超えて結びついた若い二人を幸福にしてやらうとして盡力されたのは、むしろ當然のことであつた。

其の頃、春江さんには或る大會社の社員との緣談が國許で起つてゐた。此の事は春江さん達の結婚を早めるだけに役立つた。

國許ではいろんな反對があつた。

けれども、今は完全に結びついた二人を引きはなすことは出來なかつた。

とうとう、許された。春江さんは常さんと二人、北國の鄕里に歸つて、其の實家で天下晴れての式を擧げた。國籍を離脫した。

そして六月には、期滿ちて歸國する常さんに伴はれて支那に渡つた。

常さんは、支那に於ける最新智識の一人であつた。輝かしい新歸朝者として、母校北京大學の教壇に立ち、女子師範大學にも聘せられた。

異邦人の妻として、單身夫について支那に渡つた健氣な春江さん。戀が、彼女をそのやうに強くさせたのであるかも知れぬけれど。こゝまでは春江さんの運命は順調だつた。幸福だつた。

けれども、東西南北、天涯に一人の知人も持たぬ萬里の異鄕に、たゞ一人の夫を頼みに、夫の親兄弟の家庭に這入つた時から、春江さんの幸福にはヒビが這入つた。

嘗てN――氏が「北京新聞」に書かれた『日本婦人と支那人との結婚に就いて』といふ文章の中で述べられたやうに、

「支那は古來、大家族主義の國で」

あつた。そして、

「一家に、親、子、孫と、三組以上幾組もの夫婦が、家長である祖父の統制下に家庭生活を營んでゐる國である。斯かる家庭に、今若し孫の青年が外國婦人を妻として戻つて來たとする。其の青年は先づ兩親の反對に遭はねばならない。伯叔父母夫妻の反對に遭はねばならない。古來絶對とされ來つた家長の、容赦なき苛責に遭はねばならない」

其の通りだつた。戀ゆゑに全ての愛着をふりすてゝ、國籍まで脱して來た春江さんにとつて、北京の其の日〳〵がどんなに悲しく辛いものであつたことか。

けれども、春江さんの幸福は、まだ其の爲には貧乏ゆるぎもしなかつた。新婚の二人は、どんなに強く結ばれてゐたことか。

常さんは溫厚な人だつたけれど、此の戀には勇敢であつて吳れた。自分ひとりを唯一の頼りとして跟いて來た異邦人の妻、春江さんを守つて、肉親達と抗爭した。毎日ごた〳〵がつゞいた。

斯うして春江さん達夫婦は、遂に常家から追放せられた。家庭からの追放は一族

からの追放であり、知己朋友からの追放でもあつた。

春江さん達は公寓（アパート）に住んで、常さんは其處から學校に通つた。支那服よりも洋服よりも、ドテラや浴衣を好み、刺身や味噌汁の好きな常さんと、春江さんとの生活は、いはゞ完全に日本の生活の延長となつた。

結局この方が、春江さんには幸福だつた。

けれども、春江さんは知らなかつた。常さん一にんを目標に、其の一族から、

「あの婦人と別れろ、別れたならば元通り家庭に歸ることを許さう」

といふ誘惑が、手をかへ品をかへて、持ち出されてゐることを。

N——さんの、前記の文章の中には、

「斯かる際にも、日本の青年ならば、毅然として愛情に立つ殉情性を持つてゐるが、先祖代々、親にさからふことを大逆なりとし、面子の上でも不孝の名を冠せられることを恥づる上に、生命よりも先づ利益に魅力を感ずる支那人の青年にあつては肉親故友から捨てられても尚、日本人によりて——例へば日本人經營の銀行會社に勤めることによりて——生活を保證されてゐる場合を除き、愛情を第二として利益に奔るのである」

と見えてゐるが、此の點、常さんは支那人らしくなかつたといへる。春江さんとの結婚生活を完成するために、斷乎として周圍の誘惑を拒絶した。

しかし、常さんに對する誘惑は、更に形をかへて、（日本婦人と別れろ）から、次第に（日本婦人を妻とするのはよいが、いま一人中國婦人を正式の妻とせよ）といふ主張にまで變つて行つた。

N——さんの前記の文章の一節をまた拜借しよう。

「肉親故友は既に日本婦人との結婚を認めた。唯此の上は、こちらでいま一人の支那婦人との結婚を承諾してやれば、全ての問題は解消することになる。そんな時青年は容易に屈服する。此の事は我々から見てこそ屈服ではあるが、彼等にと

つては寧ろ當然すぎる當然事といへる。といふのは、此の周圍の主張に反抗するのには、青年は常に何ものかを犧牲にしなければならぬ。然るに、此の說に從ふ爲には、彼は忍ぶべき何等の犧牲をも必要としないとしてゐる。斯かる場合、人間は、殊に功利以外に情誼の重き忘れた支那人が、兩者何れを執るかといふことは自明の理である。難きをすてゝ易きに就くのが、人間性情の致す所であるからである」

と。

新時代の支那研究家としてN――氏の言はれる所に、恐らく大きな誤謬はないのであらうが、常さんの場合には、此の說を裏切つた。周圍が如何に壓迫しても、脅迫しても、常さんは遂に春江さんの夫であつた。

斯うした中で、春江さんは女兒を生んだ、東單三條胡同にある日本の病院の一室で。他の入院患者や看護婦達で、春江さん達を支那人と思ふ者は一人もなかつた。

けれども、不幸なのは此の子供であつた。子供は當然支那人の子として、戸籍のない子である。たとひ春江さんが日本の國籍を持つてゐた所で、其の額に「私生兒」の烙印を捺されて、其の兩親が世に容れられなかつたと同じやうに、不幸の遺產を生涯背負つて行かねばならなかつたであらう。

さうでなくとも、「混血兒」の名と共に、父の國では固より、母の國に於ても、冷めたい瞳の中に育ち、且つ生きてゆかねばならなかつたであらう。

此の幼兒が、生まれて一年經たぬに、其の呱々の聲をあげた同仁病院へ腦炎と決つて入院する時、此の若い春江さん達夫婦は、賴みとする知人として、わづかに橋田、杉浦の兩氏夫妻以外に持つてゐない、はかなさであつた。

橋田さんは南支那視察の旅に出てゐた、夫人は病床にあつた。僅かに公務をさいて駈けつけた杉浦氏の好意によつて、この幼兒の冷めたくなつた屍の處置がつけられるやうになつたものゝ、原則として、支那人の子供である此の子は、いくら錢を

積んでも、死んだ其の屍を燒く火葬場すら、杉浦氏の盡力なしでは借りることが出來なかつたのだつた。

葬式は、東四六條の本願寺でしめやかに行はれた。會する者は、春江さん夫婦の外に、杉浦さん、橋田夫人、それに留學生の水島さんの、三人きりの、さびしい葬式だつた。

生れて戸籍を持たなかつた幼兒は、死んでも其の骨を埋めるべき土地を持たなかつた。常さんは、北京で亡くなつた日本人と同じやうに、日本の陸軍墓地の一隅を拜借したかつたが、それは支那人の子であるが故に、許される事ではなかつた。

五

こゝまで語つた春江さんのさびしい姿。それは春江さんや、常さんとの間に生まれた子供の薄命の姿であるだけでなく、恐らく、支那人と結婚した日本婦人や、其の間に生を享けた混血兒の運命でない——と誰が斷言出來よう。

「ぢや、あなた方の出入りする家といへば、此の廣い北京に、其の杉浦さん、橋田さんといふ、二軒きりなの」

「えゝ、さうなの」

「あたし、昨夜同窓會の名簿を見て、印をつけて置いたのだけれど、北京にはまだあたし達の同窓に、もつとも古い先輩だけど、辻井さんつて方と、河井さんつて方とがあるのよ。あなた知らない」

「河井さんつて方は知らないけど、辻井さんならよく街で見るわ。御主人は居留民會の會長さんか何からしいわ。そしてあたしの鄕里の人らしいのよ」

「御主人があなたと同鄕で、奥樣が同窓の先輩なら、いゝぢやないの、そんな人を賴つてゆけば……」

「でも、あたしは支那人の……」

春江さんはひがんでゐる。日本人を戀ひ慕ひながら、しかも自分で作つた殼の中

にとぢこもつてゐる、物恐ぢをする姿は、ちやうど始めて私達のクラスに現はれた時の春江さんそのまゝだ。

「まあ、あなたつたら、とても内氣ね。よくそれで支那にまでお嫁に來たわねえ。もつとしつかりなさいよ、元氣を出して」

と私はわざとふざけて春江さんの背を叩いた。

「でも……」

私は默つた。それは私に同じてくれない春江さんの返事のためではなかつた。輕く叩いた私の掌に、彼女の背の骨が、痛々しくて、ちやうどさゝつた樣に思へたからだつた。

春江さんは初めての女兒を亡ふと同時に、また其の體内に第二の幼兒の胎動を感じてゐた。

そして今年の春。いま彼女が抱いてゐる女の子を産みおとす時、常さんは去年の秋からの病氣で、おとろへた體を病床に横たへてゐた。

病氣は肺結核、毎日喀血がつゞいた。

(死なれてはならぬ、死なせてはならぬ)

靜養も不充分なまゝに起き上つた産後の體に撻つて、瀕死の夫を看護する彼女、春江さんも、見る〳〵おとろへて行つた。微熱が續いた。輕いせきが出た。

(とうとう、あたしまで……)

春江さんは、夫の胸を蝕みつくした病氣が、今また自分を襲つて來てゐることを感じた。

(さうだ、この子にだけは……)

春江さんは、生まれたばかりの子供が、更に其の病氣のために蝕まれることを恐れはじめた。春江さんはもう、在りし日の若さを失つてしまつた。

常さんには、もう少壯學者としての意氣も希望もなかつた。たとひそれが有つた

としても、其の肉體は驅使にたえない活ける屍にひとしかつた。

春江さんは、さびしかつた。天涯の孤獨……といふ寂しみが、いつも〳〵も彼女の心を灰色にぬつた。

夜更け、幼兒を眠らせ、夫の藥を煮ながら、ぢつと齒を喰ひしばつた彼女の頰には、いつも〳〵熱い涙が流れて、それがつめたくなる時はなかつた。

私の北京に來ることを知つた時、春江さんは、どんなに喜んで吳れたことかしれぬ。しかし、春江さんは隱してはゐたが、私を迎へてくれた翌朝、初めての咯血をしたらしかつた。

そして、北京の冬の訪づれ初めた十一月の初め、彼女は自からも病みつゝ、なほ瀕死の夫を護つて日本に歸つて行つた。突然のことで、少しも知らないうちに、風のやうに去つて行つた春江さんだつた。

出發の日とも知らず、私は語學敎師の家からの歸途を北京ホテルの書籍部にまわつて、晩くなつて戻つて來ると、

「常太太が見へて、此の手紙を置いて行つた」

といつて、阿媽が一通の手紙を持つて來た。

「冬が來ないまに私共は日本へ歸へります。此の冬を越せないであらう主人と、私自身でさへが毎日の咯血にやつれてゐる今、北京の冬が恐ろしいのです。同じ死ぬなら、日本の土地でと申しますので、主人も一緒に參ります。

さようなら、嵯峨さん。

貴女が日本にお歸りになる頃まで、私共はもう、此の世の人であることを許されないでせう。

せめて、發つまへにいま一度ゆつくりお目にかゝりたうございました。

なほ、いつかお立替下さつた金子五十圓、何も彼も不如意なまゝに、おそくなりました、お許し下さいませ」

五枚の十圓札と共に出て來た鉛筆の走り書きの、文字はかすれて淡かつたが、何の愚痴もなく、永嘆もなく、淡々たる水のやうに書き流した、この短い文章の裡にこそ、無限の悲痛も慟哭も盛られてあつたであらう。

（可哀さうな、可哀さうな、春江さん）

恐らく生きて再び日本の土をふまうとは考へなかつたであらう春江さんは、嘗て火のやうな光明と歡喜に心ときめかせつゝ越えた玄海灘を、それから四年後の今、悄然として歸つていつたのだ。

數多い家政科出身のクラスメートの中でも、學校時代は一番すげなく送つた春江さんではあつたが、此の見も知らぬ土地で、示してくれたかづ〳〵の親切、あつい友情。やつと土地にも人にも馴れ初めて來たと思ふとき、忽然と消え去つた春江さんだつた。

「せめて發つ前にいま一度ゆつくりお目にかゝりたうございました」

とは、私の方からこそ言ひたい言葉である。

春江さんのさびしい微笑みは、もう二度と私の部屋に見ることは出來ないし、

「さようなら、またいらしてね」

王府井大街の夕まぐれ、さう言つて夕暮の人波に消えて行つた、春江さんの痛せた後姿は、たとひ王府井に冬が來ようと、春が來ようと、再び見送ることが出來なくなつてしまつた。

太田春江さんの生涯は、來年の春をも待たずに終るかも知れぬ。國境を超えて熱愛した背の君の生命は、もう今年の冬はおろか、日本までの途中をさへ保證されなかつたといふ。そして背の君の死につぐものは、春江さんのそれであらうも知れぬ。これは恐らく慘酷な想像ではあらう。けれども二つ揃つて消える二人の上にこそ、現世では求め得られなかつた幸福があるのかも知れぬ。

「さようなら、春江さん。どうぞ日本へついて……」

窓に寄つて祈る私の眼に、凍てついた北京の夜空の、墜ちることのない星が、一杯映つた。

六

春江さんのやうな境遇に陷つたものは、今の所、私のクラスメートの中には一人もない。けれども、私の今になつて考へることは、春江さん達の戀愛や結婚に仲介者があつたことである。

其の仲介者には、今日もなほ、日支親善は兩國民の血肉的結合によつて將來される……と言ふ、抱腹すべき主張に立てこもる××協會を中心とした、×××や〇〇〇での、日本の所謂支那通の名士達である。

支那人が何故に日本の教養ある婦人を求めるか、而も其の結末が如何な道を辿るかといふことに就いて、私はこゝに書かうとは思はない。

けれども、さうした日本の名士達が、同文だの同種だのといつて、其の誤まつた指導原理を國民に強要し、その上私共の姉妹を春江さんの辿つたやうな薄幸の中にさらし、更に何の罪科もない甥姪を不幸にさせてゐる事實の、あまりに多いのを見て、柄にもなく私は限りない憤懣をおぼえるのである。

相異つた兩國が、たとひ同種の民族であらうとも、國家權益が一致しなければ遂に融和しないことは、既に私共が世界史の上で教へられて來てゐる筈である。

露・獨に別れて戰つたポーランドでも、佛蘭西に反抗する三國同盟に奔つた伊太利でも、或は皇帝の叔甥といふ血族關係にあり乍ら、互ひに死力を盡して戰つた英・獨でも、私共は既に學びつくしてゐる筈である。

同文といふことで親善が出來るなら、日支以上の同文である英・米が、何故二度までも戰爭をしなければならなかつたのであらうか。

斯んな日支親善論に、何の權威もないことは勿論であるけれ共、日本には未だ未だ斯うしたことを本氣で唱へる「具眼の士」や「先達の士」があつて、國を毒し民

を害してゐる。そして此の人達が、事の支那問題となるや、何時でも「俺が〳〵」と出しやばりたがる。

私の同窓の友、太田春江さんもまた、さうした誤まつた親善論によつて、無駄な人柱にされた氣の毒な一人であつた。

私は事を春江さんに藉りて、實はさうした誤まつた日支親善論と、其の論者とに、無力ながらも抗議がしてみたかつたのである。

北京の學生達の話

一

江戸が東京と改められても、なほ「大江戸」の舊稱がなつかしく、今に「江戸前」だの「江戸ッ子」だのといふ言葉が人口に膾炙されてゐるやうに、民國十八年に政府が金陵に移つて名實ともに南京となり、北京は明朝の昔の名、北平と復つたものの、北平といふよりは北京といふ方に、市民は限りない愛着と未練とを持つてゐて、ぺいぴんといふよりはぺきん・ぺいちんと呼ぶことが、土地ッ子のしきたりになつてゐたので、江蘇・浙江あたりから來た市政府の、市黨部の、乃至は大學教授のといつた要人方までが、日本で言へばズウ〳〵辯で、ぽつきん・ぽつきんと仰有つて、支那語の一二三がやつと間違はなくなつた私共に、「北京大學」の四文字は、字引きや土地の人のいふが如く、ぺいちん・たあしゆえと言つたものか、それとも先生方を見倣つて、ぽつきん・たあしよと言つたものか――と迷はせ、果はえゝ面倒なと、誰にでも通ずるペキン・ユニバシティなる紅毛人の言葉を使はせたり、兎に角、頭を惱ませたことでございます。

が、どちらにしても北支隨一といふよりも、支那第一等の大都會で、文化都市で、學校都市で、おまけに樹があつて、水があつて、料理がうまく、酒がよく、その上美人が多い……といふのですから、在北京の紅毛人諸君が「森の都」だの「綠の町」だのといふ、バタ嗅い愛稱をつけて、北京の生活をエンジョイとかいふことをなさつてゐても、全く世界中、何處からも苦情が出ないくらゐの、北京は住みよい町でございます。

殊に、夏から秋へかけて、北京の町はこんもりと綠におほはれて、明清の昔、皇帝の行列を二階から見下す不屈者のないやうにといふ嚴つい役人達の心遣ひで、二階建の家屋といふものがないお蔭で、一望千里、宮廷の禁苑の跡である景山や北海公園の瓊島やに登つて見わたすと、見る限りの綠、見る限りの森で、其の間から、故の宮城の黄瓦が金色に輝いてゐるといつたわけで、人間死ぬなら此の土地で……

と考へたくなる位の美觀を呈するのです。

支那事變が起ると、北支の話があちらこちらで筆や口にされ、私にまでも何か書けといふ註文が來たのですが、私は何はさておいても、北京の事を書かうと先づ考へました。

それは、青春四ヶ年に亘つて勉學した思ひ出の北京、森の都北京、綠の町北京……といふだけではありません。嘗て滿洲から北京に這入つた張學良は、天津や保定に住まずに、北京におろした腰を、とう〳〵下野する前日まで上げなかつた程魅力のある、こゝは北支の中心地であるし、北支文化の粹を集めてゐるし、更にまた北清事變についで、今度の事變で再び在留邦人が公使館區域に籠城を繰り返したといふ因緣のある土地でもあるからです。

二

牡丹・海棠・ライラック・アカシヤ、合歡と次々に花が咲いて散ると、あとは夾竹桃です。これは魔除けになるといふので、禁苑跡は言はずもがな、鉢植の夾竹桃なら、中流以上の家庭には何處にでも五鉢や十鉢は有らうと思はれる位。それと十刹海や北海・中海・南海の蓮の花。それから百日紅。これは、たとへば東公民巷と呼ばれる公使館區域の正金銀行支店、舊步兵隊、公使館と門を並べた前に、百度の烈日下、ずつと血の様に咲いた百日紅の並木。そしてもう今日此の頃は、棗の實が熟れてこぼれる頃です。

兎に角、さうした花を眺めながら、北京に入つた旅人の群は、人力車を連ねて必ず故宮城の參觀に出かけ、天壇や祈年壇やといつた古蹟、白雲觀や東岳廟、喇嘛廟やといつたお寺を見物してまはるのですが、之を要するに、北京といふ所は日本の奈良と京都とを合せたやうな故都で、名所舊蹟がある以外に何の取柄もない土地、過去の土地である――とは、よく中支から來てゐる指導者達が仰有る所なのですが、いゝえどう致しまして、北京はそれ以外に、支那第一の學校都市、文化都市として

は、誰が何といはうとも、立派な現在の都でさへあるのです。

人口百二十萬。といつた所で、大體支那の人口からして、統計學者によつては三億五千萬から五億五千萬まで、驚くなかれ二億といふ差があるのですから、全くあてにはなりません。其の北京市民の指導者は、誰が何といつても北京大學を中心に、二十校に及ぶ大學專門學校の男女學生なのです。

ひとり北京とだけは申しません、支那の近代の歷史を見たゞけでも、學生が常に文化の先端を行つてゐることが知れませう。何しろ學校敎育が普及したといはれる今日でさへ、百人に一人か二人、尤も甚しい論者に從ふと、百三十五人に一人といふのですが——兎に角、それくらゐ僅かの人間より上の學校に上れない支那ですから、これ等の學生の家庭が、如何に經濟的に餘裕を持つてゐるかといふことも想像出來ます。

從つて、制服といふものゝない男女學生の服裝は相當贅澤なものがあり、それが支那のモダンボーイやモダンガールの間に於ける流行に決定的な支配力を持つてゐますし、シネマやダンスやといつた享樂機關は、殆んどこれ等學生に獨占されてゐますし、金があつて、若くて、おまけに暇があるといふのですから、學生の勢力はとても、とても大なるものがあります。

殊に、學生の社會的勢力といふものは、學生は第二の國民なり——などゝいつた青年を自重させる樣でゐて、而も虛勢する敎育をうけて來た私共には、想像も及ばない位です。

周知の如く、支那では、士農工商の士といふのは、官吏と讀書人のことだつたのです。今日でも四民平等とはいひながら、矢張り官吏と讀書人である學生とが、農工商の上にあるらしいのです。

つまり、支那の學生は、わが國の學生が第二の國民——一人前扱ひされないのに比べて、實に第一の國民、しかも第一の國民中の最も偉い階級に屬するわけです。

殊に、此の學生が一たび大衆運動を起すと、何しろ非常な多數が一致結束し、しまひには全國の學生が之に呼應するのですから、役人でも、學校當局でも、勿論公安局の巡警も、文字通りに「袖手傍觀」をしてゐるより外はありません。

斯うした支那學生の社會的な地位なり、勢力なりを本當に知つてゐないと、

「國際列車、學生隊に占領せらる」

だとか、或は

「外交部長（大臣）、學生團に毆打さる」

だとかいつた外電の見出しや、而も學生達には、何のお咎めもないといつた內容が、われわれ日本人にはピッタリと來ないのではないかと思ふのです。

三

尤も斯うした反面に、國力の日に盛んな日本に生をうけた私共には、出會つた事もない樣な事件に、しば〳〵直面してゐる彼等は、結局、彼等が第一線に立つて國民を率ゐ、指導してゆかねばならない破目になります。

例へば、滿洲事變に際しての學生運動です。彼等は殆んど二十年に亘つて排日抗日の教育を受けて來ました。そこへ滿洲事變です。こゝだ、教育の効果を示せ——とばかり、國民黨市黨部といふ蔣介石の出店が北京にもあつて、それがこゝを先途と學生を唯一の目標にして煽つたのですから、たまりません。

張學良クンなんてペケ、國民黨政府絕對支持といふわけで、「誓死抗日」だの、「誓不買日貨」だのと白く拔いた喪章を腕にまいて、毎日わつしよ〳〵と示威行列です。

何しろ、學校は「國難來」で無期休業です。そこで、示威行列でもしてゐなくちや……といふので、毎日中山公園の廣場に集まつて學生大會、ついで示威行進です。

此の行列は街の十字路に來ると停り、中から幹部の學生が列外に出て來て、「打倒日本（リーベンヌ）、打倒日本、打（ダー）、打（ダー）、打（ダー）」と音頭をとると、外の連中が聲を合せて「打、打、打」と之に和するといふ工合で、學生の意氣まさに天を衝く——と土地の新聞が書

いたくらゐに、當人達にとつては悲壯そのものらしいんです。

所が、一般の市民は一體どうか――といふと、斯うした、「打て、打て」といふ學生達の聲に、通りかゝつた藥屋の手代が、よせばいゝのに、

「打甚麼呢（ダーシャメマナ）」（何を打つたゝきますかね）と訊いたばつかりに、「此の非國民野郎」といふので、袋叩きに遭つて血まみれにされたといふ位ですし、米市大街の自轉車修繕屋の客が、

「一體學生達は、毎日何をなんなに騒いでるんだらう」

といへば、其處の親爺、修繕の手もやめず、

「餘ッ程嬉しいことが有るんでなけりや、とてもあゝは騒げまい」

といつた調子で、全く落語みたいですが、本當の話なんです。

初めは私も町の斯うした騒ぎに驚いて、政府の役人さんが、日本人の私を寄寓させて置いちや拙からうと思つて、轉宿してもよいが――といつて主人に申し出たことがあります。けれども、主人は平氣なもので、

「排日運動は公のもの、貴君が私の家にゐるのは私のこと。公私を混同する必要はありません。轉居しなくていゝですよ」

といひましたがねえ。

學校が休みになつて、二ヶ月も會つたことのない友達が、通りすがりだからと言つて訪ねて來ましたが、腕には例によつて「誓死抗日」の喪章をつけてゐます。排日行進の戻りだといひます。

「排日大會や排日行進をやつた戻り道に、日本人の俺のところへ寄るなんて、そんなの有るかつてんだ」

といふ私に、その男もまた、

「公と私とは別だよ。それに大會は一時に、行進は三時ですんぢやつたんだ。あれはもうあれでいゝんだよ」

と言ひました。

四

誓不買日貨――といつたり、誓不賣日貨――といつた所で、紙や米から、着類から、支那帽子、支那靴に至るまで、輸入品の八割以上を日貨に仰いでゐるのが北支那です。天津などでは、市の商工會議所の代表が市黨部に乗り込んで「日本人と取引するな」といふ指令を突き返したといふ話です。何しろ日本の紙に、日本のインクで印刷した指令が、御丁寧に日本製の封筒に這入つてゐたといひますから。

日貨排斥も、天津の總税務司だつた英人のシンプソン、英人だから例のシンプソン夫人の旦那ぢやありません。これが天津に頑張つて居た間は、北支でも物すごかつたさうです。

何しろ英本國から送つて來るので資金に不自由はありません、それをばら撒いて、やれ〳〵とけしかけたんですから。シンプソンがゐた頃には、排日運動が起る度に、南滿あたりの學生までが北支へ乗り込んで氣勢をあげたもので、旅順や奉天から汽車賃をつかつて駈けつけても、結構、日給にはなつたといひます。

そのシンプソンが、天津のフランス租界にあつた自邸の、而も自分の部屋で、何者にともなく、暗殺されました。昭和五年の九月でしたか。犯人はいま以て分りません。私、私だつて知るものですか。

シンプソンが暗殺されてから後の、北支の日貨排斥が、いつも〳〵物にならないのと思ひ合せると、それまでの日貨排斥運動の背後の糸を、誰がひいて居つたか、どこの國がやらせて居つたか――といふことが、よく分らうと思ふのです。

ところで、日貨排斥の指令が北支に届くたびに、いつも之を邪魔するものがあります。それは何かといふと、日頃排日宣傳ばつかりやつてゐる新聞社なのだから皮肉な話です。といふのは、毎も各新聞社が連名で、

「新聞は報導機關であり、宣傳機關である。然るに今、日本製の紙を使つてゐる

我々にそれを使ふなとなると、新聞の發行が出來ない。新聞を發行出來ないのはよいが、それでは肝腎の日貨排斥の宣傳をすることが出來なくなる。そこで、新聞用紙と印刷肉とだけは、此の限りに非ずと改めて呉れ」

といふ、相手が新聞社の連名ですから、これには政府も黨部もありません。新聞用紙と印刷肉だけのつもりで除外すると、他からも似たやうな理由をつけて、除外例を要求して來る。しまひには、日貨排斥なんか何も出來なくなるんださうです。

北京に東安市場といふ勸工場があります。其處の文房具店に現はれた女子師範大學の學生が、腕には例によつて「誓不買日貨」の喪章をつけてゐるんですが、そのくせ日貨を買つてゐるんです。それが、

「便箋ちやうだいな」

といつて這入つて來た三人の女子學生なのですが、番頭の出したのを見ると、何と日貨も日貨、「高畠華宵畫」の洋裝美人の表紙のついた便箋なのです。三十仙だといひます。

「安いわねえ……」

とばかりに感心して見とれてゐた三人のうちの一人が、

「時に番頭さん、これは東洋(ニッポン)製なの、西洋製なの」

と訊いたものです。すると番頭が、へッへと笑ひながら、

「勿論、これは東洋製でございますよ」

と答へたものですから、さあ事です。

「妾達を誰と思ふか。その妾達に對して、物もあらうに日本製を賣らうとは以ての外である。お前達は蓋し非國民である……」

女が三人です、姦ましく喚鳴り立てます。へきえきした番頭が、こんどは獨逸製だと稱する便箋を出しました。多分大阪あたりで出來た獨逸製だらうと思ふのです

が、値段は一冊一元四十仙だといひます。

すると、今まで威丈高になつて呶鳴つてゐた三人が、急におとなしくなつたので何といふかと思つてゐると、

「日本製がいゝから、早く包んでしまつておくれ」

而も此の文房具店の前には、大きな看板が出てゐて、それには墨痕いとも鮮やかに、「誓不賣日貨」と大書してあるのです。

五

斯うした學生達の指導者は、言ふまでもなく各大學の教授連です。昭和三年に教育界にクーデーターがあつて、日本留學の教授連は殆んど放逐され、アメリカ・ドクトルが之にとつて代つたのです。北京大學に例をとつてみても、日本留學生でないとつとまらない、東方文學系の周作人教授にしろ、徐祖正や錢稻孫の講師連にしろ、影のうすいといつたらありません。

これにひきかへ、アメリカ・ドクトルは、此の世を我が世とぞ思ふ、跳梁ぶりです。おまけに、北京の近代的な建物、例へば清華大學、輔仁大學、協和醫學校等は建物から設備から費用まで添へてアメリカが呉れたのです。其の他國立北平圖書館や、青年會館やといつた豪奢な建物も、アメリカから貰ひました。

協和醫學校は、孫文臨終で有名な附屬の協和病院と共に、ロックフエラー財團から建てて貰つたことになつてゐるのですが、こゝの總經理は依然としてグリーンといふアメリカ人がやつてゐます。そして此のグリーン博士から電話がかゝつて、三十分以内に飛んで來ない大學校長は、北京中に一人もありますまい。

學校ではアメリカ第一の教育をうけます。その上、毎年成績優秀の卒業生はアメリカが費用を出して留學させて呉れるし、米國學士で戻つて十年ほど經ち、新聞の人事往來に名前が出る程度の社會的名士になりさへすれば、更にアメリカの出身學校から「博士」の學位を贈つて來て、忽ち「米國〇〇博士」となれる仕掛になつて

ゐるから、彼等の中でアメリカに留學した連中が、アメリカと手を切るなどといふことはまあ無いと考へていゝのです。

尤も、アメリカに巡業にいつた俳優の梅蘭芳に「文學博士」の學位を贈つた大學さへアメリカにあるのですから、支那向けの學位は、恰度支那向けの輸出品は凡て「フオア・チヤイナー」として、セコハンを差し向ける習慣になつてゐるやうに、特別に手輕に考へたり取扱つたりしてゐるのかも知れません。

餘談ですけれども、その點日本などは愼重の上にも愼重ですし、外務省の文化事業部で留日支那學生に學資をやつたり、世話したりしてゐますが、卒業すればそれつきりで、知らぬ顔の半兵衞です。あつさりしたものだといつてほめていゝのか、今後は何とか色をつけるべきかは、今度の事變の次には、すぐ直面する而も一考すべき問題だと思ふのです。

六

兎に角、北京に於けるアメリカの勢力といひますか、アメリカ崇拜と言ひますかは、非常なものです。これが中支や南支になると、拜英や、崇蘇になるのでせうが、北支は先づアメリカです。

尤もドルが其の大半の原因ですが、アメリカ一流の世界第一の宣傳が、流石の白髮三千丈の支那人を壓倒してゐるとも言へます。

例へば映畫がさうです。北京の學生達は、固よりアメリカは知りません。けれども映畫は見ます。見ます所ではない、映畫とダンスと、スケートと蹴球とが語れなければ、學生つき合は出來ない位のものです。

映畫に出て來るアメリカは、世界一の文明國として、彼等の尊敬をこれでもか、これでもかと要求してやみません。私どもが支那の學生と一緒に映畫館に這入つて、一番苦々しく思ふのは、あのニュース映畫です。

故意が偶然かは知りませんけれども、イギリスやアメリカの科學的な軍備の實況

や、百何十階といふ大廈高樓の寫眞に交つて、必ず藁葺き屋根を背景にした田植の實況だの、盆踊りだのといふ、日本が現はれるのです。

と言つて、學生達が直ちにアメリカの大廈高樓に住む豪奢を眞似ることは出來ません。ところが、其處はよくしたもので、彼等には又彼等で、彼等らしい分に應じたアメリカ模倣があるのです。

それは何かといふと、前に申したやうに制服のない彼等です。先づ洋服を眞似ます。北京の學生達は、素張らしく型のいゝ洋服を着ますが、それは映畫から學びとるのですから、服の色となると、靑だの黃だのといつた原色のかつた、依然支那式なケバ〳〵しいのを、得々として着てゐる結果になります。

七

惡口は兎も角、初めに申した如く、北京は昔からの文化都市ですから、そして學校都市ですから、蔡元培や胡適之や、蔣夢麟や、陳垣や、傅斯年やといつた外國人にまで知られた學者は、何れも「北京の學者」と言つて差支へはありません。

先達て、西安事變の土產か、支那事變の餘澤かは知れませんが、兎に角出獄して今後の動きを注目されてゐる共產黨の陳獨秀も、支那文學革命の鬪士として、胡適や亡くなつた梁啓超等と共に、北京大學を本據に、民國初年に白話文學の提唱をやつた一人です。

もう最近では、日本の支那學者もよく、

「胡適の人氣は去つた、もう彼の時代は過ぎた」

などと言ひます。或はさうかも知れません。けれども、彼の講義は何時も教室が一杯になりますし、嘗て陳獨秀が入獄した當時、「陳獨秀と中國文學」に就いて特別講義をした時などは、北京中の學生がワンサと集まり、講義中に三度も講堂をかへなければ、續々と押しかけて來る聽衆を容れきれなかつた程で、まだまだ支那のインテリの間に於ける彼の指導的地位は、牢固たるものがあります。

これも餘談ですが、嘗て日本から來た國際政治哲學とかの學者でF――といふ人があります。本人に言はせると、大いに胡適を敎へて來たんださうですが、當の胡適は、

「F――の英語の上手なのには驚いたよ、隨分新しい言葉を知つてゐる男だよ」

といふのです。そこでF――氏の意見は、と訊くと、彼はニヤリとして、而も輕く、

「靠不住（カオブチウ）」

といつてあつさり片付けてしまつたんです。さあ、何と譯しませうか、（信用出來ぬ）とか、（あてにならぬ）（たよりにならぬ）といつた言葉なんですが。

私は、近頃そのF――氏が、講演や新聞雜誌で、尤もらしい政治哲學論を開陳してゐるのを見る毎に、妙に胡適の批評の言葉と、あの微笑とも苦笑とも憫笑ともつかぬ、ニヤリを思ひ出すのです。

胡適の著書ですか。胡適の著書で代表的なものは、矢張り「中國哲學史大綱」でせう。御承知のやうに、この本は民國八年に上卷が出たまゝで下卷が出てゐません。これは彼が宋代哲學の所まで來て行きつまつた、それは何故かといふと、佛敎哲學を究はめるのでなければ、哲學史の書けないことに氣がついた。そこで中國哲學史を中止して佛敎の研究をやつてゐるんだといふ噂話です。一時佛敎關係の書物をどん〳〵買つてゐたことは事實ですが。

胡適がこんな事の出來るのは、彼が經濟的に非常に惠まれてゐるからです。彼は周知の如くアメリカで學位をとりました。從つて、彼が排日抗日の煽動者だといふ理由も、多分さうした關係からだらうとは、誰もが考へたり言つたりするのですが、アメリカの關係ではなくて、イギリスの關係だといふのが、本當のやうです。

何しろイギリスの對支文化事業から、研究費として毎年五萬ポンドの金を、義務を負はずに只で貰つてゐるのですから、いくら義務を負はなくてよくても、人情として矢張り反日本的になるので、これは仕方がない――と、彼の周圍の者は言つて

ゐました。五萬ポンドの一割位は、イギリスの政策援助のためにバラ撒いてゐるに相違ないといふのです。

これだけでも、彼の生活は豐かなものです。その上、彼が坐つて久しい北京大學文學部長の椅子は、前清以來の權威ある椅子ですし、物欲しさうな他の學者とは違つて、堂々と構へてゐますが、それが少しも可怪しくありません。

年齢はまだ四十前後でせうし、日本の物識り先生方のいふやうに、彼を時代おくれとすることは、少々早計のやうです。

八

北京の話――といふのが、北京の學生の話になつてしまひましたが、「北京」から學生と學生の集まる場所を取り去れば、昔ながらの「支那」が殘る位のものです。だから、といふわけでもありませんが、紙數もつきたやうですから、こゝらでやめて置きませうか。どうも、取りとめのないことを長談議いたしました。

出文協承認ア三五〇〇二六

昭和十七年十二月廿日印刷
昭和十八年一月一日發行（五、〇〇〇部）

定價金二圓三十錢

著者　法本義弘　東京市神田區神保町二ノ三
發行者　藤原嘉治　文協番號一〇九五〇九　東京市京橋區銀座西二ノ三
印刷者　東東五九　三協印刷株式會社　高橋郁
印刷所

發行所　東京市神田區神保町二丁目三番地
發賣所　株式會社　螢雪書院　電話九段(33)〇八二三番　振替東京三二二四九番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

本書の製本に落丁又は亂丁のある場合は御讀了後と雖も本社に於て新品とお取換いたします。

法本義弘著作目錄

青年義民　松木莊左衞門　菊判假　二四頁（非賣品）昭和八・一〇（絶版）　不知火莊

甦へる梅田雲濱　菊判假　九九頁（非賣品）昭和九・七（絶版）　雲濱會

淺見絅齋と靖獻遺言　菊判假　四三頁（非賣品）昭和九・一一（絶版）　雲濱會

內堀維文遺稿並傳　菊判　一五〇五頁（非賣品）昭和一〇・一三（絶版）　同刊行會

定本　靖獻遺言精義　上下　菊判各五〇〇頁（各六・〇〇）昭和一一・一一（絶版）　同刊行會

ラジオ新書六　淺見絅齋の靖獻遺言　新四六　三二一頁（　・五〇）昭和一五・一　日本放送出版協會

頭註　靖獻遺言　A五判　二〇五頁（二・〇〇）昭和一六・九　光生館

書くだし　續十八史略　B六判　四〇八頁（二・〇〇）昭和一六・一一　三敎書院

偉人叢書十五　梅田雲濱　B六判　一〇〇頁（　・八〇）昭和一七・七　三敎書院

支那覺え書　B六判　三三二頁（二・三〇）昭和一八・一　螢雪書院

日本人の死生觀　B六判　二六〇頁（二・〇〇）印刷中　三敎書院

35.3. 8

¥ 2.30